

看護実践研究指導センター年報

平成25年度

看護学教育研究共同利用拠点  
千葉大学大学院看護学研究科

# 看護実践研究指導センター年報

平成25年度



千葉大学大学院看護学研究科  
附属看護実践研究指導センター

〒260-8672  
千葉県千葉市中央区亥鼻1-8-1  
TEL 043-226-2377・2378  
URL <http://www.n.chiba-u.jp/center/>





## 巻頭言

看護実践研究指導センターの年報ができましたので、関係の皆様にご挨拶申し上げますとともにお届けいたします。

センターは、昭和 57 年に千葉大学看護学部を設置されてから 32 年目を迎えました。

平成 22 年に全国の教育関係共同利用拠点として、文部科学大臣より「看護学教育研究共同利用拠点」として認定していただき、また平成 24 年のセンター創立 30 周年を契機として新たな機能強化に取り組んでいるところです。

2つのプロジェクト、「教育－研究－実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発」（平成 22 年度～26 年度）と、「看護学教育における FD (Faculty Development) マザーマップの開発と大学間共同活用の促進」（平成 23 年度～27 年度）とを基盤として、全国の看護系大学の教員の皆様や、国公私立大学病院を始めとする看護職の皆様の活動にお役にたてるよう取り組んでいます。

今年度は、研修の改革として、看護学教育指導者研修と国公私立大学病院看護管理者研修において、従来型のベーシックコースと新しいプログラム開発を行うアドバンスコースを開催しました。また、看護教育－実践連携評価ツールを作成しました。一方、看護学教育における FD マザーマップは、活用ガイドを作成し、看護系学会で交流集会を開催し普及に取り組んでいます。

研究面では、プロジェクト研究として全国の共同研究員の皆様とともに実施しており、その成果は文部科学省科学研究費補助金の獲得につながっています。今年度からは、「アジア圏における看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する国際比較研究」（基盤研究（A）研究代表者：野地有子）が新たに始まりました。

センターは、宮崎美砂子看護学研究科長を中心に、センター教員ならびに看護学研究科教員が一体となって共同利用拠点の整備に努め、全国の看護職者の皆様に利用していただけるよう取り組んでいます。引き続きのご支援を重ねてお願い申し上げます。

この年報をご一読くださり、センター発展のためにご助言いただければ幸いです。

平成 26 年 3 月 31 日

千葉大学大学院看護学研究科  
附属看護実践研究指導センター  
センター長 北池 正



## 目次

### 巻頭言

1. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター概要	
1) 設置概要	1
2) 事業概要	1
3) 各研究部における研究内容	2
4) 認定看護師教育課程（乳がん看護）	3
5) 職員配置	4
6) 看護実践研究指導センター運営協議会記録	5
7) 看護実践研究指導センター運営委員会記録	7
8) 看護実践研究指導センター認定看護師教育課程運営教員会記録	10
2. 平成25年度事業報告	
1) 教育－研究－実践をつなぐ	
組織変革型看護職育成支援プログラムの開発	12
研究1「看護の独自性・専門性を可視化する リフレクション・フレームワークの開発」	14
研究2「看護教育－実践連携評価ツールの開発と検証」	17
2) 看護学教育におけるFDマザーマップの開発と 大学間共同活用の促進	22
3) プロジェクト研究	27
4) 国公立大学病院副看護部長研修	35
5) 国公立大学病院看護管理者研修	39
6) 教育－研究－実践をつなぐ臨地実習施設の看護学教育指導者研修	54
7) 看護学教育ワークショップ	58
8) 認定看護師教育課程（乳がん看護）	64
9) 教育・研究活動	71
3. 資料	
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター規程	78



## 1. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター概要

### 1) 設置概要

昭和50年代半ばにおいて、看護学は、医学と密接な連携を保ちつつ、独自の教育研究分野を確立しつつあったが、高齢化社会の進展及び医療資源の効率的運用への社会的要請の増大傾向の中にあり、特に生涯を通ずる継続的な看護教育のあり方、高齢化社会に対応した老人看護のあり方、病院組織の複雑化等に対応した看護管理のあり方についての実践的な研究及び指導体制の確立がせまられていた。

このため、昭和57年4月1日千葉大学看護学部にて、これらの実践的課題に対応するとともに、国立大学の教員その他の者で、この分野の研究に従事する者にも利用させ、併せて看護職員の指導的立場にある者及び看護教員に対して生涯教育の一環としての研修を行うため、全国共同利用施設として看護学部附属看護実践研究指導センターが設置され、その後、平成21年度からは看護学研究科が部局化されたことに伴い、看護実践研究指導センターも研究科附属となった。

なお、これまで継続看護研究部、ケア開発研究部、看護管理研究部の3研究部から構成されていたが、より柔軟で時代に即した活動が展開できるよう、平成19年4月からは政策・教育開発研究部、ケア開発研究部の2研究部構成となり活動している。

また、平成22年度より「看護学教育研究共同利用拠点」として文部科学省より認定を受けた。

### 2) 事業概要

本センターは、事業として次のことを行っている。

#### (1) 教育－研究－実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発

教育－研究－実践の連携を目指した臨地実習施設の組織変革に取り組む看護職育成支援プログラムを開発する。そのプログラムにより支援を受けた看護職が看護の独自性・専門性を強化し、組織変革を推進することによって、看護の臨床現場の組織問題の解決、看護学教育環境の整備を促進する。

#### (2) 看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進

医療の高度化に伴い、大学化が急速に進展している看護学教育におけるFDマザーマップを開発する。開発したFDマザーマップを大学間で共同活用できる体制を構築することにより、各看護系大学が看護学教育の特質を踏まえた有効なFDを計画的に企画・実施・評価できるようにする。

#### (3) プロジェクト研究

個人又は複数の共同研究員と千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教員が研究プロジェクトを形成し、看護固有の機能を追及する看護学の実践的分野に関する調査研究を行う。

#### (4) 国公立大学病院副看護部長研修

日本の医療が直面している現状を理解し、大学病院の上級管理者として現在直面している課題の中から問題を認識して構造的に分析し、問題解決に結びつく計画案を作成し、実践・検証することを通して看護管理者としての実践能力を高め、看護の充実を図る。



### **(5) 国公立大学病院看護管理者研修**

大学病院の特殊性にかんがみ、医療機関としての機能を十分に発揮し、看護の充実及び看護業務の円滑化を図るため、看護師長等看護管理者に対し看護管理上必要な知識を習得させ、その資質の向上を図り、大学病院における看護管理の改善に資することを目的とする。

### **(6) 看護学教育指導者研修**

臨地実習施設等において看護学生の看護実践を直接指導する看護学教育指導者として必要な実践的指導能力を高め、臨地における看護学教育の充実を図ることを目的とする。

### **(7) 看護学教育ワークショップ**

各大学の特性に応じたカリキュラム展開に向けて、看護職養成教育の最低限必要不可欠な教育内容をどのように設定するかを検討するとともに、カリキュラム実施上の工夫点や課題等を共有し改善のための示唆を得ることを通して、各大学の個性や特色を反映した教育の実現を推進する。

### **(8) 認定看護師教育課程（乳がん看護）**

日本看護協会認定看護師制度に基づき、特定された認定看護分野（乳がん看護）において、熟練した看護技術と知識を用いて、水準の高い看護実践のできる認定看護師を社会に送り出すことにより、看護現場における看護ケアの広がりや質の向上を図る。

## **3) 各研究部における研究内容**

### **(1) ケア開発研究部**

本研究部の継続研究課題は、看護学教育研究共同利用拠点としてセンター事業の2つのプロジェクト研究に取り組んでいる。6月には、協定校の米国サンディエゴ大学から、Connelly 教授、Inston 教授を迎えて、大学院教育（PhD および DNP）における FD について講演および、IOM レポートに関する研究会を開催し、継続的に学内・国内・国際的研究の拠点づくりを行っている。

野地教授は、千葉大学研究支援プログラム（科研費申請支援）を受けた後、「アジア圏における看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する国際比較研究」（文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（A）研究代表者 野地有子）を開始し、米国の Morse 博士をはじめ・韓国・タイ・日本から7名の講師陣を招聘し、ミックスドメソッド研究法および病院の国際化にむけた看護職の文化能力に関する国際会議を実施した。また、日本健康科学学会第29回学術大会長を務め、本邦初の ELNEC-G を米国から Strong 博士を招聘し実施した。

黒田准教授は、個人の研究においては、「認知機能低下が生じた高齢インスリン療法患者・家族への援助指針の開発」（文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）研究代表者 黒田久美子）を新たに獲得し、研究を開始した。センターの共同研究者とともに実施している「自己評価に基づく自施設完成型教育担当者育成プログラムの精錬」（文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））、千葉大学大学院看護研究科・医学部附属病院看護部連絡会議外来看護特別部会で取り組んでいる「病院外来における患者・市民・実践者・研究者の新たなニーズや期待、役割発揮の可能性」（文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））による看護専門外来に関する研究は継続中である。

赤沼講師は、個人の研究において在宅ケア領域の教育に関する研究を行った。また、平成25年



度 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究(C)）「訪問看護における臨床と教育機関の連携融合教育・学習プログラムの開発」の共同研究者となり研究を開始した。研究成果として、在宅看護における看護過程関連図に関しては、3月にテキストとして出版した。

## （2）政策・教育開発研究部

政策・教育開発研究部は、平成19年度から、看護管理研究部と継続教育研究部を発展的に統合し発足した。

近年の医療・看護を取り巻く社会的環境は著しく変化し、安全・安心な質の高い医療・看護が社会的にも期待されている。それに伴って医療・保健・福祉制度の改革も進んでいる。

政策・教育開発研究部では、このような状況を背景とした看護職者の役割の拡大や看護職者に寄せられる社会的ニーズに、より効果的に応えられる政策を提言するための医療・看護全般・看護教育に関する政策研究と、それに不可分である基礎教育と連動させた看護職者の資質の向上のための、生涯に渡る教育・人材・キャリア開発の研究・実践を目指す。

## 4） 認定看護師教育課程（乳がん看護）

乳がん看護の充実・発展に向けたエキスパートの育成及び教育プログラムの開発と、乳がん看護認定看護師の活動を推進するための研究を行う。

## 5) 職員配置

### 附属看護実践研究指導センター（専任）

研 究 部	職 名	氏 名
セ ン タ ー 長	教 授	北 池 正
ケ ア 開 発 研 究 部	教 授	野 地 有 子
	准教授	黒 田 久 美 子
	講 師	赤 沼 智 子
政 策 ・ 教 育 開 発 研 究 部	教 授	和 住 淑 子
	准教授	錢 淑 君

### 大学院看護学研究科看護システム管理学（附属看護実践研究指導センター兼任）

領 域	職 名	氏 名
病 院 看 護 シ ス テ ム 管 理 学	教 授	手 島 恵
	准教授	小 林 美 亜
地 域 看 護 シ ス テ ム 管 理 学	教 授	吉 本 照 子
	准教授	杉 田 由 加 里
ケ ア 施 設 看 護 シ ス テ ム 管 理 学	教 授	酒 井 郁 子
	助 教	黒 河 内 仙 奈

### 認定看護教育課程（乳がん看護）

分 野	職 名	氏 名
認 定 看 護 分 野 （ 乳 が ん 看 護 ）	特任准教授	阿 部 恭 子
	特任助教	大 野 稔 子

### プロジェクト

分 野	職 名	氏 名
組 織 変 革 型 看 護 職 育 成 支 援 プ ロ グ ラ ム	特任准教授	河 部 房 子
F D マ ザ ー マ ッ プ 開 発	特任助教	鈴 木 友 子
	特任助教	若 杉 歩 (※1)

※1…平成25年10月から就任



## 6) 看護実践研究指導センター運営協議会記録

### 運営協議会委員名簿

委員区分	氏名	職名等
1号委員 (看護学研究科長)	宮崎 美砂子	千葉大学大学院看護学研究科長
2号委員 (センター長)	北池 正	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長
3号委員	中村 伸枝	千葉大学大学院看護学研究科教授 (千葉大学評議員)
	吉本 照子	千葉大学大学院看護学研究科教授
	酒井 郁子	千葉大学大学院看護学研究科教授
	野地 有子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教授
	和住 淑子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教授
4号委員	小見山 智恵子	東京大学医学部附属病院看護部長
	高橋 和久	千葉大学大学院医学研究院教授
	高橋 浩之	千葉大学教育学部長
	片田 範子	兵庫県立大学看護学部長
	佐藤 禮子	関西国際大学副学長
	島田 陽子	厚生労働省医政局看護課看護サービス推進室長

平成26年2月21日現在

### 第33回看護実践研究指導センター運営協議会

1. 日 時 平成26年2月21日（金）17時30分～18時53分

2. 場 所 第二講義室

3. 出席委員 宮崎会長（看護学研究科長）、北池委員（看護学研究科附属看護実践研究指導センター長）、中村委員、吉本委員、酒井委員、野地委員、小見山委員、高橋（和）委員、佐藤委員、島田委員

#### 4. 議 題

（1）平成26年度センター事業計画（案）について

I. 特別経費（プロジェクト分）による事業

- ①看護学教育指導者研修
- ②看護学教育ワークショップ
- ③本経費によるプロジェクト

II. 特別経費（教育関係共同実施分）による事業

- ①FD マザーマップ開発

III. センター独自事業

- ①国公立大学病院副看護部長研修
- ②認定看護師教育課程（乳がん看護）
- ③プロジェクト研究

IV. 委託による事業

- ①国公立大学病院看護管理者研修

#### 5. 報告事項

（1）平成25年度センター事業について

I. 特別経費（プロジェクト分）による事業

- ①看護学教育指導者研修
- ②看護学教育ワークショップ
- ③本経費によるプロジェクト

II. 特別経費（教育関係共同実施分）による事業

- ①FD マザーマップ開発

III. センター独自事業

- ①国公立大学病院副看護部長研修
- ②認定看護師教育課程（乳がん看護）
- ③プロジェクト研究

IV. その他の委託事業

- ①国公立大学病院看護管理者研修



## 7) 看護実践研究指導センター運営委員会記録

運営委員会委員名簿（平成25年度）

委員区分	氏名	職名等
1号委員 (センター長)	北池 正	看護実践研究指導センター長 教授(大学院看護学研究科看護学専攻)
2号委員	野地 有子	教授(看護実践研究指導センターケア開発研究部)
	和住 淑子	教授(看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部)
	黒田 久美子	准教授(看護実践研究指導センターケア開発研究部)
	銭 淑君	准教授(看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部)
	赤沼 智子	講師(看護実践研究指導センターケア開発研究部)
3号委員	手島 恵	教授(大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	小林 美亜	准教授(大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	吉本 照子	教授(大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	杉田 由加里	准教授(大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	酒井 郁子	教授(大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	黒河内 仙奈	助教(大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
4号委員	中村 伸枝	教授(大学院看護学研究科看護学専攻)

## 看護実践研究指導センター運営委員会（平成25年度実施分）

年月日 平成25年4月17日（水） 16:20～17:00

- 議題等
1. 共同研究員の採否について
  2. 平成25年度副看護部長研修応募者の採否について
  3. 平成25年度看護学教育指導者研修募集要項（案）について
  4. 平成25年度看護管理者研修募集要項（案）について
  5. 特別経費（教育関係共同実施分）による特任教員の募集について

年月日 平成25年5月22日（水） 16:25～16:48

- 議題等
1. 平成25年度認定看護師教育課程研修生選抜試験の合否判定（案）について
  2. 平成25年度認定看護師教育課程講師及び授業概要等について
  3. 平成25年度認定看護師教育課程（乳がん看護）臨地実習について

年月日 平成25年6月19日（水） 16:20～16:50

- 議題等
1. 国公立大学病院看護管理者研修（ベータコース）の受講者（案）について
  2. 看護学教育指導者研修（ベータコース）の受講者（案）について
  3. 看護学教育ワークショップ実施要項（案）について

年月日 平成25年7月17日（水） 14:00～14:55

- 議題等
1. 平成25年度認定看護師教育課程（乳がん看護）臨地実習要項（案）について
  2. 特別経費（教育関係共同実施分）による特任教員の公募について
  3. 認定看護師教育課程（乳がん看護）特任教員の公募について
  4. 看護学教育ワークショップ実施要項（案）について

年月日 平成25年9月6日（金） 10:00～10:20

- 議題等
1. 平成25年度看護学教育ワークショップの参加者について
  2. 特別経費（教育関係共同実施分）による特任教員の公募について

年月日 平成25年10月16日（水） 16:20～17:00

- 議題等
1. 認定看護師教育課程（乳がん看護）研修生選抜試験に係る選抜試験結果の開示要領（案）について
  2. 平成26年度認定看護師教育課程（乳がん看護）研修生募集要項（案）について
  3. 認定看護師教育課程（乳がん看護）の特任教員の応募について
  4. 自然災害・事故及び交通機関のストライキ等に伴う研修の措置（案）について

年月日 平成25年12月18日（水） 17:10～17:25

- 議題等
1. 平成25年度認定看護師教育課程（乳がん看護）研修生の修了判定について



年月日 平成26年2月5日(水) 16:20~17:08

- 議題等
1. 平成26年度附属看護実践研究指導センター事業計画について
  2. 平成26年度国公立大学病院副看護部長研修について
  3. 平成26年度共同研究員の公募について
  4. 平成25年度修了保留の研修生について
  5. 平成26年度認定看護師教育課程(乳がん看護)研修生選抜試験実施要項(案)について
  6. 平成25年度センター事業報告会について

年月日 平成26年3月12日(水) 17:05~17:35

- 議題等
1. 平成26年度国公立大学病院副看護部長研修募集要項(案)について
  2. 平成26年度共同研究員の採否について

## 8) 看護実践研究指導センター認定看護師教育課程運営教員会記録

認定看護師教育課程運営教員会委員名簿（平成25年度）

委員区分	氏名	職名等
1号委員 (センター長)	北池 正	看護実践研究指導センター長 教授(大学院看護学研究科看護学専攻)
2号委員	阿部 恭子	特任准教授(看護実践研究指導センター認定看護師教育課程(乳がん看護))
	大野 稔子	特任助教(看護実践研究指導センター認定看護師教育課程(乳がん看護))
3号委員	赤沼 智子	講師(看護実践研究指導センターケア開発研究部)
4号委員	手島 恵	教授(大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	増島 麻里子	准教授(大学院看護学研究科看護学専攻)
	飯塚 恵子	副看護部長(医学部附属病院看護部)
	星野 恵美子	公益社団法人千葉県看護協会 常任理事



## 看護実践研究指導センター認定看護師教育課程運営教員会（平成25年度実施分）

年月日 平成25年5月22日（水）8：57～9：37

- 議題等
1. 平成25年度認定看護師教育課程研修生選抜試験の合否判定（案）について
  2. 平成25年度認定看護師教育課程講師及び授業概要等について
  3. 平成25年度認定看護師教育課程（乳がん看護）臨地実習について

年月日 平成25年7月11日（木）9：00～10：04

- 議題等
1. 平成25年度認定看護師教育課程（乳がん看護）臨地実習要項（案）について
  2. 認定看護師教育課程（乳がん看護）選抜試験開示請求について
  3. 認定看護師教育課程（乳がん看護）専任教員の公募について
  4. 日本看護協会基準カリキュラムの改正について
  5. 認定看護師教育課程（乳がん看護）説明会の開催について

年月日 平成25年10月16日（水）・・・持ち回り審議

- 議題等
1. 認定看護師教育課程（乳がん看護）研修生選抜試験に係る選抜試験結果の開示要領（案）について
  2. 平成26年度研修生募集要項（案）について
  3. 認定看護師教育課程（乳がん看護）特任教員の応募について

年月日 平成25年12月18日（水）9：00～9：34

- 議題等
1. 平成25年度認定看護師教育課程（乳がん看護）研修生の修了判定について

年月日 平成26年2月5日（水）9：00～9：30

- 議題等
1. 平成25年度修了保留となった研修生について
  2. 平成26年度認定看護師教育課程（乳がん看護）研修生選抜試験実施要項（案）について
  3. 平成26年度認定看護師教育課程（乳がん看護）説明会の開催について

## 2. 平成 25 年度事業報告

### 1) 教育－研究－実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発

#### 【目的】

教育－研究－実践の連携を目指した組織変革に取り組む看護職育成支援プログラム開発を通じて、組織変革の核となる人材育成支援を実施し、看護の臨床現場の組織問題の解決、看護学教育環境の整備を促進する。

#### 【全体計画】

千葉大学大学院看護学研究科の強み（21世紀 COE プログラム「日本文化型看護学の創出・国際発信拠点」の実績）である「看護実践研究」を基盤に、新たな教育－実践連携へのニーズに応えるための新たな取り組みとして、本事業計画では、新規研修プログラム開発・試行・改善へと展開させる「プログラム開発・検証フェーズ（1～3年目）」と、開発したプログラムを活用し、組織変革を実現しながら教育－実践連携モデルを構築・検証を実施し、モデル情報を発信する「モデル展開・発信フェーズ（4・5年目）」で構成し、それぞれのフェーズにおいて、以下の取り組みを連携させながら発展的に展開していく。

#### 1) 看護実践研究の推進

##### ① 看護の独自性・専門性を可視化するリフレクション・フレームワークの開発

看護は一回性の実践であり、優れた看護実践に潜む看護の価値は目に見えないため、それを目に見える形にする（可視化する）手立てを開発する専門領域横断型研究が必要である。特に、組織変革の中核となる中堅看護職・看護管理者は、長年の経験に導かれて正しい行動をしていることが多いが、それが看護の独自性・専門性であると、本人が自覚できていないことが多く、活用できるリフレクション・フレームワークを開発する。リフレクション・フレームワークとは、自身が実施したことを振り返り、その価値を言語化し、それを組織変革のヴィジョンを描く際に役立てるための思考を支援する概念枠組みを指す。

##### ② 看護教育－実践連携評価ツールの開発と検証

新たな教育－実践連携へのニーズに応えるためには、現在の教育現場と実践現場の連携状態を診断・評価することが不可欠であるが、現在、日本の組織文化の特性を踏まえた教育現場と実践現場の連携状態を診断・評価するツールは存在しない。本事業では、千葉大学大学院看護学研究科の強みである COE の研究成果を積極的に活用し、日本の組織文化の特性を踏まえた教育現場と実践現場の連携状態を診断・評価するツールを開発する。さらに、研修終了後の組織変革プロセスを対象に、研修修了者の所属機関との共同研究を実施し、組織のニーズに応じた看護教育－実践連携モデルを構築する。

## 2) 看護職育成支援プログラムの開発

上記、①、②の研究成果を活用して、「看護の独自性・専門性を強化するリフレクションプログラム」、「看護教育－実践連携診断・評価支援プログラム」、「組織変革支援プログラム」という3つのプログラムを開発する。

## 3) 組織変革支援型研修事業の実施

開発した3つのプログラムを看護系大学、臨地実習施設それぞれの組織ニーズに応じて組み合わせ、看護教員・臨地実習施設看護職（中堅看護師・看護管理者）を対象とした新たな研修事業を行うことによって、組織変革の核となる人材を育成する。研修終了後は、研修修了者に対し丁寧なフォローアップを行うことによって、持続的な組織変革を支援する。

## 4) 情報収集・蓄積・発信

事業を効果的・効率的に進めるために、「情報収集・蓄積」を行う。まず、情報集積システムを構築し、変化する保健医療福祉の動向や、看護教員・臨地実習施設看護職の学習ニーズを系統的に収集する。集積した情報はデータベース化し、研究、プログラム開発に役立てる。

さらに、事業の進捗状況は、随時、「情報発信」する。HP・ニュースレター等を整備するとともに、全国の看護系大学や臨地実習施設で活用可能な研究成果は、学会・研究会で発表する。事業4年目には、国際・国内シンポジウムを開催して、広く成果の発信を行う。最終的には、構築した教育－実践連携モデルに関する情報をデータベース化し、全国共同利用体制を整備する。

## 研究1「看護の独自性・専門性を可視化するリフレクション・フレームワークの開発」

少子高齢化が進展し、社会の格差が拡大していくのに伴い、保健医療福祉の現場でも、さまざまな問題が生じてきている。このような激動期に保健医療福祉の現場で働く看護職は、リスクマネジメント、管理や人材育成など、専門領域横断的な広範な活動を、看護職としての独自の価値に基づき実施していくことを求められている。しかし、これらの活動の中核となる中堅看護職・看護管理者は、日頃から自らの経験に基づいて行動していることが多く、自身の行動の根拠に看護の独自性・専門性があることを自覚しづらい傾向にある。

研究1では、リスクマネジメント、管理や人材育成など、専門領域横断的な組織変革プロジェクトを遂行する中堅看護職・看護管理者の思考を看護の独自性・専門性に基づいて支援する枠組み、すなわち、「看護の独自性・専門性を可視化するリフレクション・フレームワーク」の開発に向けた基礎的研究を実施している。リフレクションとは、自らの経験の振り返りで、経験した事実とそれについての思考から構成され、そこに意味の付加や拡充がともなう経験の再構築とも呼ばれるものであり、本リフレクション・フレームワークの開発によって、組織変革活動の中核となる中堅看護職・看護管理者が、自らの行動の根拠に看護の独自性・専門性があることを自覚し、その価値に基づいて組織変革のビジョンを描き、プロジェクトをすすめることが可能となる。完成したリフレクション・フレームワークは、組織変革型看護職育成支援プログラムの中で活用される見込みである。

平成25年度研究メンバー

研究課題	番号	氏名	所属	職名
看護の独自性・専門性を可視化するリフレクション・フレームワークの開発	1	近藤 浩子	東京医療保健大学	教授
	2	斉藤しのぶ	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
	3	杉田由加里	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
	4	杉原多可子	泉大津市役所	健康福祉部理事
	5	和住 淑子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター	教授
	6	錢 淑君	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター	准教授
	7	黒田久美子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター	准教授
	8	河部 房子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター	特任准教授
	9	北池 正	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター	センター長



## I. 研究計画

### 1. 研究目的

組織変革プロジェクトを遂行する看護職者の思考を、看護の独自性・専門性に基づいて支援をするリフレクション・フレームワークの構成要素を明らかにする。

### 2. 研究方法

#### 1) 研究対象

附属看護実践研究指導センターが実施する組織変革プロジェクト遂行型研修の受講者を対象とする。研究は、対象が受講した研修別に、以下の3つに分けて実施する。

- ・中堅看護職のリフレクション・フレームワーク要素に関する基礎的研究  
→平成 22 年度看護学教育指導者研修受講者のうち研究協力に同意の得られた者 10 名
- ・病棟看護管理者のリフレクション・フレームワーク要素に関する基礎的研究  
→平成 22 年度国公立大学病院看護管理者研修受講者のうち研究協力に同意の得られた者 10 名
- ・上級看護管理者のリフレクション・フレームワーク要素に関する基礎的研究  
→平成 22 年度国公立大学病院副看護部長研修受講者のうち研究協力に同意の得られた者 8 名

#### 2) 研究方法

上記3つの研究ごとに、以下の段階を踏んで研究を行う。

- ① 附属看護実践研究指導センターが実施する組織変革プロジェクト遂行型研修の受講者に研究協力を依頼する。
- ② ①で研究協力に同意の得られた受講者が研修中に作成したレポート等の諸記録を、受講者の許可を得て収集する。
- ③ ①で研究協力に同意の得られた受講者に対し、プロジェクト遂行中及びプロジェクト遂行後に、2～3回、インタビューガイドに沿ったインタビュー調査を実施する。
- ④ ②③で収集したデータをもとに、以下の分析を行う。

##### A) 対象者ごとの分析

- i. 対象者が組織変革課題を見出し、プロジェクトを遂行していく過程から、プロジェクト遂行における方針や目標、方策に変更のあった転換点を特定する。
- ii. iで特定した転換点における対象者の「直接的体験」「リフレクション」「結果として起こった行動の変化」「それに影響を与えた外的刺激」のつながりを区別して記述できる分析フォーマットを作成し、それにそって事実を整理する。
- iii. iiで整理した事実間のつながりから、iで特定した転換点における「変化内容」を分析する。
- iv. 転換点に含まれる対象者の活動には、どのような看護の独自性・専門性の発揮が認められるかを明らかにする。
- v. 対象者の個別のプロジェクト遂行ストーリーを文章として描写する。

##### B) 全体分析

全対象者に共通する要素を、①プロジェクト遂行時のリフレクションに必要な事実、②転換点の共通性、③転換点に含まれる看護の独自性・専門性、の観点から分析し、リフレクション・フレームワークの構成要素を導き出す。

## II. 研究の進捗状況

現在、対象が受講した研修別に、収集・整理したデータを分析し、リフレクション・フレーム

ワークの構成要素を抽出し、リフレクション・フレームワーク試案を作成し、活用ガイドの作成をすすめている段階である。

病棟看護管理者のリフレクション・フレームワーク要素については、

- 1.問題意識の根底にある自身の信念
- 2.問題意識
- 3.問題意識につながる直接的体験
- 4.直接的体験に基づく感情の揺らぎ
- 5.変化する自組織の状況
- 6.変化する状況における自身の立場と役割
- 7.プロジェクトの目標
- 8.組織変革の方法
- 9.活用できる資源や出来事
- 10.働きかけの結果起こった対象の変化や波及効果

の10の要素が明らかになった。これら10の構成要素に加えて、「看護の独自性・専門性」の内容、転換のきっかけとなった「外的刺激」の内容を検討し、組織変革プロジェクトの遂行を支援するリフレクション・フレームワーク試案を作成し、活用ガイド（案）を作成した。

また、本年度は、これらの研究成果に基づき、当センターが実施する国公私立大学病院看護管理者研修の研修体制を一部変更し、リフレクション・フレームワークを用いて、自施設の現状を踏まえた自身の管理実践を記述し、その振り返りを小グループで行う研修を実施した。

中堅看護職者、上級看護管理者のリフレクション・フレームワーク要素の抽出、リフレクション・フレームワーク試案については、現在検討中である。

## 研究2「看護教育－実践連携評価ツールの開発と検証」

看護学教育の高度化、看護系大学の急増に伴い、大学教育に相応しい臨地実習施設や実習指導者の確保が困難になってきている。この問題は、看護学生の看護実践能力の低下、看護職の次世代育成機能の低下につながることから、新人看護職の離職の増加→中堅看護師の疲弊→組織崩壊→更なる実習施設・実習指導者の不足、という悪循環を招いている。このことは、看護学教育の高度化に伴い、新たな教育－実践連携へのニーズが発生していることを示唆する。

この新たな教育－実践連携へのニーズに応えるためには、現在の教育現場と実践現場の連携状態を評価することが不可欠であるが、現在、教育現場と実践現場の連携状態を評価するツールは存在しない。看護系大学が増加し、各大学が質の高い教育の提供に向けて独自の取り組みを進める中、教育現場と実践現場の連携・協働に関わる課題は多様である。実習を展開する医療施設の特徴も多様であり、大学側にとっても、実習施設側にとっても、互いの特徴を理解しつつ質の高い学習を保障する実習環境の整備に向けて連携を強化することが今後さらに求められ、このためには自施設における連携状況を評価するためのツールが必要である。

以上をふまえ、研究2では、組織の多様性とそれに起因する連携の多様性をふまえた評価ツールの開発に向け、研究活動を展開している。

### <平成25年度 研究メンバー>

- 北池 正 (看護実践研究指導センター センター長)
- 野地 有子 (看護実践研究指導センター 教授)
- 黒田久美子 (看護実践研究指導センター 准教授)
- 赤沼 智子 (看護実践研究指導センター 講師)
- 河部 房子 (看護実践研究指導センター 特任准教授)
- 若杉 歩 (看護実践研究指導センター 特任助教)
- 粟井 直子 (東京大学医学部附属病院 看護師長)
- 池袋 昌子 (医療法人社団 誠弘会 池袋病院 看護部長)
- 石井恵利佳 (獨協医科大学越谷病院 看護主任)
- 小山田恭子 (全国社会保険協会連合会 社会保険看護研修センター 所長)
- 上本野唱子 (岐阜医療科学大学 教授)
- 西山 正恵 (東京医科大学看護専門学校 専任教員)

## I. 研究の進捗状況について

### 1. 研究目的

臨地実習における看護系大学と臨地実習施設との連携状況を把握するための評価ツールを開発する。

### 2. 研究方法

本ツールは以下の段階を踏んで開発する。平成 25 年度は、4) 5) を中心に進めた。

- 1) 看護教育－実践連携モデル（暫定版）の作成
- 2) 教育現場および実践現場の実習指導関係者へのインタビューとその分析
- 3) 看護教育－実践連携モデルの完成
- 4) 看護教育－実践連携評価ツール試行版の作成
- 5) 看護教育－実践連携評価ツール試行版の妥当性の検証
- 6) 看護教育－実践連携評価ツール試行版の修正と検証

#### 1) 看護教育－実践連携評価ツール試行版の作成

平成 24 年度に完成した「トップ管理者のための看護教育－実践連携モデル」（次頁参照）に基づき、大学・実習病院間の連携の要素を抽出し、評価ツールの質問項目内容を検討した。その結果、4つの大項目、6つの質問項目群、41の質問項目（5段階評定）から成る看護教育－実践連携評価ツール（トップ管理者版）を作成した。4つの大項目は以下であった。

- I. 大学・病院間の連携を推進・維持する仕組み
- II. トップ双方の対等な関係性に基づく目標の共有
- III. 大学・病院間の連携を円滑にする大学側・病院側の要因
- IV. 大学・病院間の連携のアウトカム

次に、大学・病院に共通する質問項目群と、別々の質問項目群とをまとめ、質問項目を配置した。また、本ツールの前提となるツール開発の意図や使い方について、ガイドを作成し、添付した。

#### 2) 看護教育－実践連携評価ツール試行版の妥当性の検証

##### 調査対象者

連携モデル作成に向けたインタビュー調査の対象となった6大学の学部長・学科長と、その実習病院の看護部長・副看護部長。さらに附属病院をもつ大学3校に追加依頼を行った。対象者に研究依頼書を送付し、同意書の返送をもって同意を得た。

##### 調査方法

上記対象者に対して、試行版ツールを郵送し、インタビュー前までの回答を依頼した。インタビューでは、試行版ツールの質問項目の内容やその有用性、ツールの使い方等について、インタビューガイドに基づき、約1時間程度の半構成的インタビューを行った。インタビューは、対象者の了解を得てICレコーダーに録音し、後に逐語録に起こした。



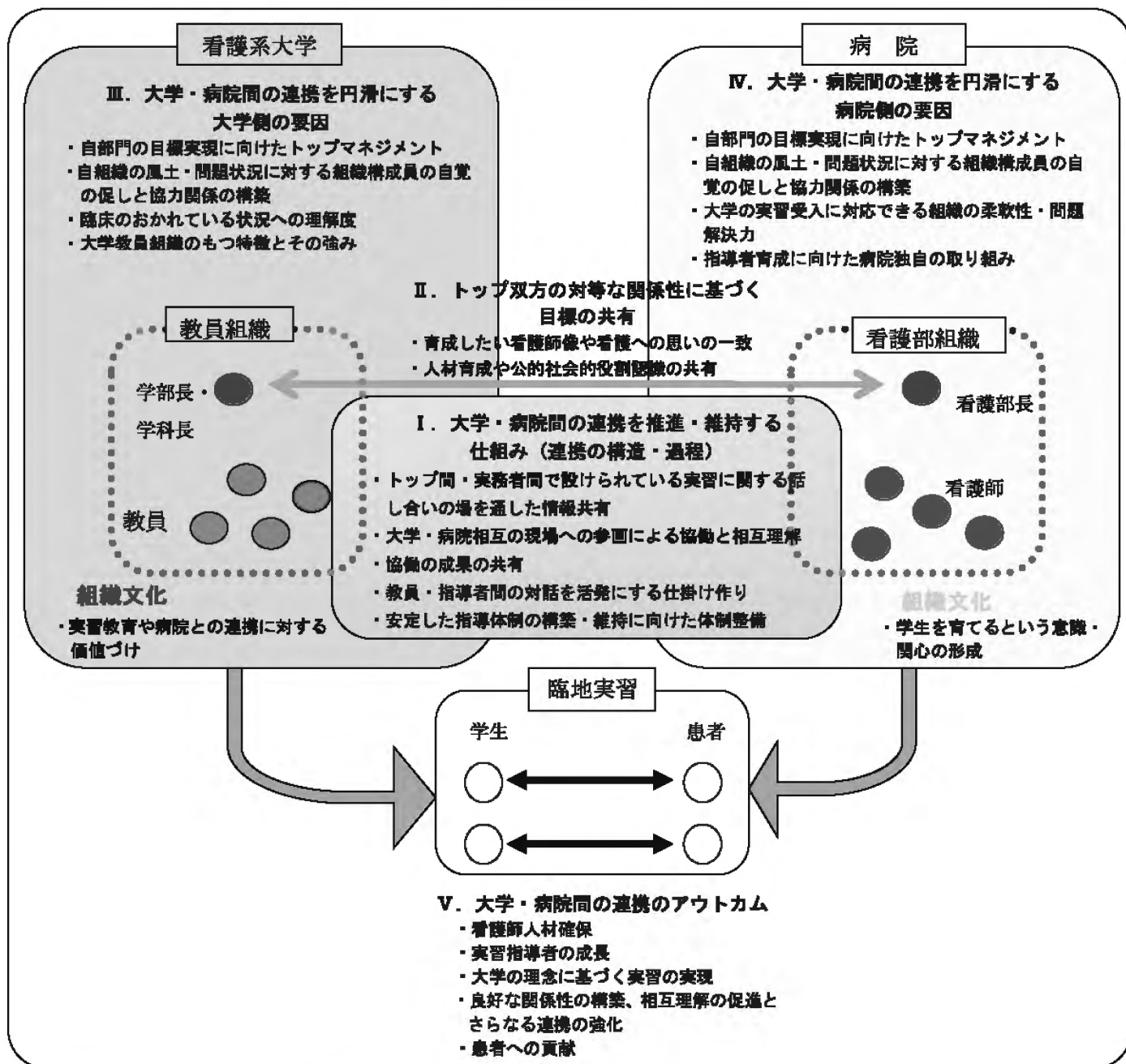


図 トップ管理者のための看護教育－実践連携モデル

## 分析方法

データは内容分析を行った。

### (1) 看護教育－実践連携評価ツール（試行版）の妥当性の検討

- ① 全インタビューデータの逐語録より、試行版ツールの質問項目毎に内容の明確さ、答えやすさに関わる語りを抽出し、同じ意味内容毎にまとめた資料を作成した。
- ② ①を元に、質問項目の修正案を研究会議で検討した。

### (2) 看護教育－実践連携評価ツール（試行版）の有用性や使い方の検討

- ① 全インタビューデータの逐語録より、試行版ツールの使い方に関する意見を抽出し、同じ意味内容毎にまとめた資料を作成した。
- ② ①を元に、本ツールの具体的な使用方法について検討した。

## 結果

研究依頼の結果、5名の看護系大学学部長・学科長相当の者、6名の大学病院看護部長・副看護部長相当の者、計11名から調査への同意が得られた。

インタビュー調査にて得た主な意見を、以下に示す。

### (1) ツールの意義・有用性に関する意見（抜粋）

- ・使えると思う。大学・病院間で様々な会議をしているが、そもそもどういう学生を作るのかという話し合いをしていないことに気づかされた。今までは大学の要望に応える形でやってきた部分があったので、そこは話し合いが必要と思ったし、定期的に行う中で互いの認識がどうなっているのかを確認し合うことが大事と思った。
- ・現在行っている連携の振り返りになった。具体的には、大学として、病院と連携し地域社会に対する取り組みをしていかななくてはいけないと感じた。
- ・これで本当にいいのかなと思うときに、これを使って客観的に認識できると思う。（自己評価として使用しても）結局それをきっかけに、もっとこういうことを聞いてみようと思うだろう。そういう意味ではコミュニケーションツールにはなると思う。
- ・ここにある質問項目は既にやっていることなので、評価が良くてついてしまうが、だからといって問題がないわけではない。よりよい連携、一体化した教育をしていくためにはまだまだと感じている。形式的なことはこれで測れると思うが、それで良いのか。現在の自大学の連携上の課題は明確にはならないと感じる。

### (2) 質問項目についての意見と修正（抜粋）

- ・質問に答えたことが最後にどうフィードバックされるのか、総括するとどういう結果なのかが見えにくい。
  - ・質問項目の意図が分かれば、簡単につけられると思うが、これはどういうことかと考えると、時間がかかってしまう。
- p1 ツールの概要の説明で、ツール作成の意図を明記。大項目毎に、評価のねらいを明記。また大項目毎に自由記載欄を設け、一連の質問項目の評価を通して確認したり、新たに気づいた点などを自由に記述できるようにした。
- ・全体構成について。質問項目が押し並べて並んでいるために、見づらい。ポイントを強調する、選択肢はまとめるなどの工夫が必要。
- 質問項目とスケールは別に表示し、強調部分をゴシック体にする等のレイアウトを変更した。
- ・文言の意味がわかりにくい。（例、職場風土、価値など）
  - ・自組織内の関係者や構成員といった言葉は、誰を指すのかがわかりにくい。
  - ・主語が不明。自分のことを答えれば良いのか、組織のことを答えれば良いのかがわかりにくい質問がある。
  - ・自組織のどういう状況を想定すればよいかかわかりにくい質問がある。
- 質問の意図が伝わるような文言の修正、主語の明確化、具体例の例示などして、質問文を修正した。

・連携を進めていく上で生じる謝礼等の金銭的な問題について評価する項目が必要と思う。  
→大項目Ⅲ.大学・病院間の連携を円滑にする大学側・病院側の要因に属する質問項目に「トップとして、病院との協働事業の企画に当たり、関係者の金銭的な報酬や身分を保障する体制づくりを行っている。」を追加した。

さらに、看護実践研究指導センターの全教員で検討を行ったところ、大学・病院間で設けられている話し合いの場の状況について評価する前に、トップ管理者として把握しているかどうかの自己評価が必要であるとの意見が出された。さらに、組織の多様性とそれに起因する連携の多様性をふまえたツールを開発するという当初の目的をふまえると、本ツールの評価からは自組織の強みが何であるかが明確にならないため、これを明確にするような質問項目が必要である、といった意見が出された。以上をふまえ、大項目『Ⅰ.大学・病院間の連携を推進・維持する仕組み』に属する質問項目に「実習の前提となる大学・病院の教育方針や育成したい看護師像などについて、大学・病院間で話し合う場の有無や現状を、トップとして把握している。」を含む4項目を、大項目『Ⅲ.大学・病院間の連携を円滑にする大学側・病院側の要因』に属する質問項目に「トップとして、強みという観点から自大学(自病院)や教員組織(看護部組織)の特徴を検討したことがある。」を追加し、最終的に質問項目は47項目となった。

## Ⅱ. 今後の予定

次年度は、これまでの看護教育－実践連携評価ツール作成過程について、日本看護学教育学会、日本看護管理学会にて発表する予定である。また、本ツールが、附属病院をもたない大学にも適用可能であるかを検討し、より汎用性の高いツールへと精錬させていきたい。

## 2) 看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進

平成19年の大学設置基準の改正以来、看護系大学は個別にFD（ファカルティ・ディベロップメント）を実施してきた。しかし、看護学教育に特化したFDの企画・実施・評価といった一連の体系的なFDプログラムの指針がないため、各看護系大学の企画は単発的であり、教員の能力を持続的に向上できるものにはなっていない。

本プロジェクトは、全国看護学教育研究共同利用拠点である、千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターが、看護学教育に特化したFDマザーマップを我が国で初めて開発するものである。

開発したFDマザーマップを利用することで、看護系大学が大学単位あるいは教員個別に必要なFD活動に利用できる資料や講師などを検索でき、我が国の大学間の相互交流が活性化されることが期待できる。

本プロジェクトは平成23年度より5年計画で開始した。

### 1. プロジェクトの目的および目標

本事業の目的は、医療の高度化に伴って大学化が急速に進展している看護学教育において、各看護系大学が高等教育における看護学教育の特質を踏まえた有効なFDを計画的に企画・実施・評価できるよう支援することである。

この目的を達成するため、以下2点の目標を掲げる。

- (1) 高等教育における看護学教育の特質を踏まえた体系的なFDマザーマップおよびFDプランニング支援データベースを開発する。
- (2) 開発したFDマザーマップを看護系大学間で共同活用できる体制を構築し、全国6ブロックの基幹校の研修をうけた教員（ファカルティ・ディベロッパー）により推進体制を構築する。

### 2. 実施体制（平成25年度）専門家会議委員24名

川島 啓二	国立教育政策研究所高等教育研究部 部長
佐藤 浩章	大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部門准教授
加藤 かおり	新潟大学教育・学生支援機構 大学教育機能開発センター准教授
中島 英博	名城大学大学院大学・学校づくり研究科准教授
松浦 和代	札幌市立大学看護学部教授
吉沢 豊予子	東北大学大学院医学系研究科教授
飯岡 由紀子	聖路加看護大学看護学部准教授
永山 くに子	富山大学男女共同参画室学長補佐
阿曾 洋子	武庫川女子大学看護学部・看護学研究科設置準備室教授
雄西 智恵美	徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部教授



井手 知恵子	大分大学医学部看護学科教授
遠藤 和子	山形県立保健医療大学保健医療学部看護学科教授
宮崎 美砂子	千葉大学大学院看護学研究科教授・研究科長
正木 治恵	千葉大学大学院看護学研究科教授
吉本 照子	千葉大学大学院看護学研究科教授
中山 登志子	千葉大学大学院看護学研究科准教授
○北池 正	千葉大学大学院看護学研究科看護実践研究指導センター長
野地 有子	千葉大学大学院看護学研究科看護実践研究指導センター教授
和住 淑子	千葉大学大学院看護学研究科看護実践研究指導センター教授
黒田 久美子	千葉大学大学院看護学研究科看護実践研究指導センター准教授
錢 淑君	千葉大学大学院看護学研究科看護実践研究指導センター准教授
赤沼 智子	千葉大学大学院看護学研究科看護実践研究指導センター講師
鈴木 友子	千葉大学大学院看護学研究科看護実践研究指導センター特任助教
若杉 歩	千葉大学大学院看護学研究科看護実践研究指導センター特任助教

(○ 委員長)

### 3. 平成 25 年度の取り組み

#### (1) FD マザーマップ完成版の作成

平成 24 年度 FD マザーマップ Ver.1 (試行版) を完成させたが、平成 25 年度はこれをもとに FD マザーマップ Ver.2 (完成版) の作成に取り組んだ。

FD マザーマップ Ver.1 に関する意見を広く収集するため、日本看護研究学会、日本看護科学学会、千葉看護学会の各学術集会で交流集会を開催した。また、FD マザーマップに関する講演等を希望する大学へ看護実践研究指導センターから講師を派遣し、同時に意見の収集も行った。集めた意見は学内会議および FD マザーマップ開発専門家会議に持ち帰り内容の検討を重ね、FD マザーマップ Ver.2 を作成した。



## 学内会議（全 8 回）

- 5月9日 マザーマップの広報についての検討
- 6月19日 モデル校の支援と推進方法の検討
- 8月29日 FD プランニングデータベース公開に向けた検討
- 10月10日 マザーマップについて集約した意見をもとに内容を再検討
- 11月12日 第2回専門家会議の結果を受けてマザーマップの構造と内容の検討
- 12月24日 マザーマップの構造と内容、活用ガイドについての検討
- 1月21日 マザーマップの内容、活用ガイドについての検討
- 2月28日 第3回専門家会議の結果を受けてマザーマップの構造と内容の検討

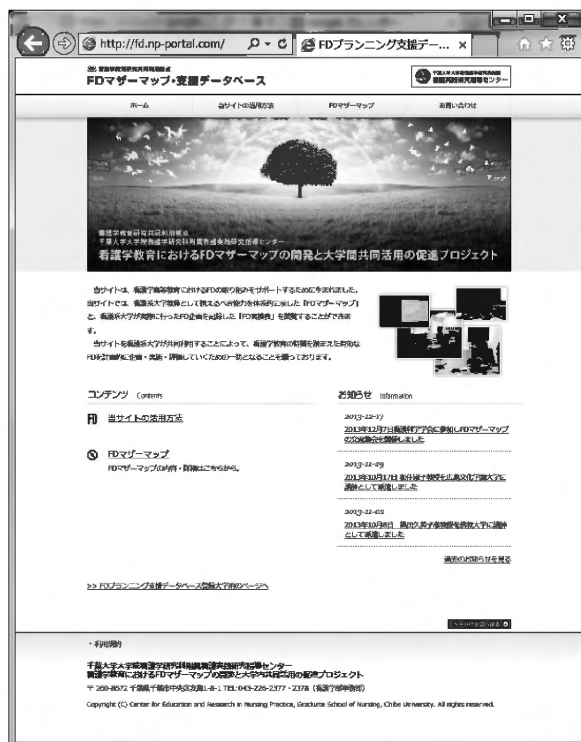
## FD マザーマップ開発専門家会議（全 3 回）

- 7月23日 FD マザーマップ活用ガイド Ver.1 の内容説明とモデル校の支援の検討
- 11月7日 大学間共同活用の体制構築、FD マザーマップの完成版に向けた検討
- 2月4日 完成版に向けたマザーマップの内容、活用ガイドについての検討

## （2）FD プランニング支援データベースの公開

FD プランニング支援データベースは「看護学教育における FD マザーマップ」と、各看護系大学が実際に行った FD 企画が記録された「看護系大学の FD 実績表」が掲載されており、簡単な操作で必要とする実践的な情報、FD に利用できる資料（物的資源）や講師（人的資源）の情報を入手することができる。また、本データベースを各看護系大学が活用することによって、大学間の相互交流が活性化されることが期待される。

本データベースは平成 23 年度から 2 年半の開発期間を経て、平成 25 年 10 月 18 日に公開した。平成 25 年度は試用期間であるが、公開後にデータベースへの登録を全国の看護系大学に呼びかけ、現時点（平成 26 年 3 月 20 日）で 14 校の登録がある。



FD プランニング支援データベース URL

<http://fd.np-portal.com/>

### (3) 講師派遣

- ① 平成 25 年 6 月 20 日 札幌保健医療大学看護学部  
野地有子教授、鈴木友子特任助教
- ② 平成 25 年 10 月 2 日 新潟県立看護大学  
北池 正センター長
- ③ 平成 25 年 10 月 8 日 佛教大学  
黒田久美子准教授
- ④ 平成 25 年 10 月 17 日 広島文化学園大学  
和住淑子教授
- ⑤ 平成 26 年 3 月 7 日 岡山県立大学（東京八重洲にて実施）  
黒田久美子准教授、若杉歩特任助教
- ⑥ 平成 26 年 3 月 20 日 産業医科大学産業保健学部看護学科  
和住淑子教授

### (4) FD 講演会の開催

平成 25 年 6 月 29 日 FD 講演会「看護系大学における大学院教育のFDを考える」を千葉大学けやき会館にて開催した。プログラム内容は、以下の通り。

- ① Susan L.Instone 氏（サンディエゴ大学）  
米国における大学院教育－DNP コース  
Developing DNP Faculty: Opportunities and Challenges
- ② Cynthia D.Connelly 氏（サンディエゴ大学）  
米国における大学院教育－PhD コース  
Educating the Next Generation of Nurse Scientists
- ③ 近田政博氏（名古屋大学）  
大学院における研究室教育の課題と展望

### (5) 学術集会での発表

- ① 平成 25 年 8 月 23 日 日本看護研究学会第 39 回学術集会（交流集会）  
看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト  
川島啓二氏、遠藤和子教授、北池 正センター長、鈴木友子特任助教
- ② 平成 25 年 9 月 14 日 千葉看護学会第 19 回学術集会（交流集会）  
看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト  
遠藤和子教授、北池 正センター長、鈴木友子特任助教
- ③ 平成 25 年 12 月 7 日 第 33 回日本看護科学学会学術集会（交流集会）  
看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト  
北池 正センター長、和住淑子教授、黒田久美子准教授、鈴木友子特任助教
- ④ 平成 25 年 12 月 7 日 第 33 回日本看護科学学会学術集会  
看護系大学が FD 活動において感じる困難と FD 企画実施状況との関連について  
鈴木友子、北池正、遠藤和子、野地有子、和住淑子、黒田久美子、錢淑君
- ⑤ 平成 26 年 2 月 20～21 日 EAFONS 17TH INTERNATIONAL CONFERENCE

Development of the faculty development mother map in nursing education.

Yoshiko Wazumi, RN, PhD; Kumiko Kuroda, RN, PhD; Tomoko Suzuki, RN, MN;

Shu Chun Chien, RN, PhD; Ariko Noji, RN, PhD; Tadashi Kitaike, PhD

(6) FD ネットワーク代表者会議への参加

平成 25 年 9 月 13 日

京都大学高等教育研究開発推進センター主催 第 6 回 FD ネットワーク代表者会議

「FD ネットワークおよび教育関係共同利用拠点の現状と課題」

北池 正センター長

(7) 東アジア地域のFDニーズ等について現地調査

平成 26 年 3 月 8 日～12 日 北池 正センター長

中国医科大学看護学院 李小寒 院長、趙 副院長

瀋陽医学院看護学院 郭宏 院長

大連医科大学 閻徳亮 学長、韓記紅 国際交流処長

大連医科大学看護学院 姜平 院長



(8) 今後の予定

今後は完成した FD マザーマップを全国の看護系大学が活用していただけるよう普及に努めるとともに、FD プランニング支援データベースの登録大学を増やし、大学間の相互交流が活性化するようにプロジェクトを推進していく。



### 3) プロジェクト研究

プロジェクト研究は、個人又は複数の共同研究員と千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教員が研究プロジェクトを形成し、看護固有の機能を追求する看護学の実践的分野に関する調査研究を行うものである。研究期間は1年とし、必要に応じて継続している。平成25年度は、下記のテーマで実施された。

#### プロジェクト1 新人看護師教育担当者育成プログラムの精練

##### I. プロジェクト研究参画者（共同研究員）一覧

プロジェクト名	番号	氏名	所属	職名
新人看護師教育担当者育成プログラムの精練	1	宮崎 貴子	杏林大学医学部付属病院	教育専任看護師
	2	三谷 理恵	神戸大学大学院保健学研究科	助教
	3	室屋 和子	産業医科大学産業保健学部	准教授
	4	杉原 多可子	泉大津市役所	健康福祉部理事
	5	西山 ゆかり	天理医療大学	准教授
	6	鈴木 康美	東邦大学医療センター佐倉病院	副看護部長
	7	神部 雅子	東邦大学看護キャリア支援センター	副センター長
	8	田村 清美	東邦大学医療センター大森病院	副看護部長
	9	梶野 加寿枝	東邦大学医療センター佐倉病院	看護師長
	10	和住 淑子	看護実践研究指導センター	教授
	11	黒田 久美子	看護実践研究指導センター	准教授

##### II. 研究の概要

平成22年度4月から新人看護職員の卒後臨床研修が努力義務化されたが、新人看護職員を現場で直接指導する実地指導者を支える教育担当者が、適切な教育支援を展開する能力をどのように培うことができるかが、この制度の成否の鍵を握っている。平成21年12月に厚生労働省より出された「新人看護職員研修ガイドライン」では、「教育担当者に求められる能力」や「育成のための研修プログラム例」については明示されてはいるが、それらの能力を組織としてどのように育てていくのかについては言及されていない。

我々は、平成20年度から科学研究費補助金を受け、①「新人看護師教育担当者能力自己評価票」、及び②自施設完成型新人看護師教育担当者育成プログラムを開発してきた。

### Ⅲ. 研究計画

平成 25 年度の課題は 2 つである。1 つは、上記①のツールとしての信頼性・妥当性の検証である。もう 1 つは、②の教育担当者育成プログラムを運営していく研修企画者（教育責任者）向けの支援プログラム開発である。これは平成 23 年度に②を検討する段階で明らかになった課題である。

なお、本研究における用語の定義を以下に示す。

新人：新人看護師。プリセプターシップを導入している施設では‘プリセプティ’を指す。

#### 実地指導者

：新人看護師を現場で直接指導する先輩看護師。プリセプターシップを導入している施設では‘プリセプター’を指す。

#### 新人看護師教育担当者

：現場で実地指導者を支援する役割をとる看護師。プリセプターシップを導入している施設では‘プリセプター’を支援する役割をとる看護師を指す。スタッフ看護師である場合や、師長、副師長が兼務している場合もある。

### 1. 「新人看護師教育担当者能力自己評価票」の信頼性・妥当性の検討

#### (1) 対象

先行研究で調査票の送付に承諾された 400 床以上の病院 310 施設に所属する新人看護師教育担当者の役割をとる看護職を対象とする。「新人看護師教育担当者能力自己評価票」の項目数が 40 のため、200～400 の回答数を目指す。

#### (2) データ収集方法

##### ① データ収集の内容

以下の 3 種類の内容について、データ収集を行う。

##### (i) 新人看護師教育支援担当者能力自己評価票

40 項目、4 段階のリカートスケールの自記式質問紙で、5～10 分程度で回答が可能である。

##### (ii) GSES 一般セルフエフィカシー（自己効力感）尺度（板野、東條 1986）

セルフエフィカシーとは何らかの行動をきちんと遂行できるかどうかの予期であり、GSES 一般セルフエフィカシー（自己効力感）尺度は、そういった予期の一般的な傾向を測定する尺度である。すでに信頼性・妥当性が確認され、20 年以上にわたり、多くの領域で活用されている。本研究では、基準関連妥当性の確認のために使用する。

##### (iii) 個人の基礎情報

職位、看護職経験年数、実地指導者経験の有無、教育担当者経験年数について、新人看護師教育担当者能力自己評価票の最後の頁で質問する。

#### (3) 研究協力依頼の手順・方法

郵送による自記式質問紙調査で実施する。上記 310 施設の看護部長に対して、往復葉書にて協力依頼し、協力承諾施設の担当窓口者へ協力の得られる対象者数分の調査票一式を送付する。施設ごとに各対象者に配布を依頼し、回答は、各自で返送を依頼する。

再現性の調査については、研究者の所属機関の関連施設の教施設に協力を依頼する。その施設への調査票には、〈施設ごとの ID 番号－対象者番号〉を事前に振っておき、

新人看護師教育担当者能力自己評価票に2回（2回目は1週間後）回答し、返送を依頼する。

#### （4）分析方法

- 1) 因子分析による因子構造の検討：探索的因子分析
- 2) 信頼性の検討
  - （1）内的整合性：Chronbachの $\alpha$ 係数によって評価
  - （2）再現性：1回目と2回目（約1週間後）の測定結果を用いて再検査信頼性係数（1回目と2回目の相関係数）を評価

#### 3) 妥当性の検討

同様の概念についての測定尺度はなく、今回は以下の2方法で妥当性を検証する。

- （1）構成概念妥当性：因子分析による因子妥当性を確認する。
- （2）基準関連妥当性  
「一般セルフエフィカシー尺度」との相関係数を評価する。

#### （5）倫理的配慮

- 1) 調査票には施設名や氏名は無記名とする。
- 2) 記入した調査票は、個別に郵送できるように返信用封筒を同封する。
- 3) 回収した調査票は、コード化し個人を特定するようなことはない。
- 4) 調査票の結果は本研究以外に用いることはしない。
- 5) 調査結果公表の際には、施設名や個人が特定できないようにする。
- 6) 本調査が終了後には、当方が責任を持って裁断し、破棄する。
- 7) 研究の同意は、返信をもって同意を得たものとする。
- 8) 看護部長に、研究参加者の推薦と調査票の配布を依頼するため、研究参加が研究に参加したかの有無がわからないように、事前に看護部長には、調査票の配布以後の情報に関してはお知らせしないことを了承していただく。研究参加者にも返信しなくても紹介者にはわからないことを事前に文書で説明する。
- 9) 再現性の調査では、事前に研究者の所属機関の関連施設数施設に協力を依頼する。その施設への調査票には、〈施設ごとのID番号－対象者番号〉を事前に振っておき、新人看護師教育支援担当者能力自己評価票に2回（2回目は1週間後）回答し、返送を依頼する。この調査に関しても1～8に関する倫理的配慮については同様の説明を文書でおこなうと共に、再現性をみるためにID番号を付けさせて頂くことを事前に了解を得る。

#### 2. 研修企画者（教育責任者）向けの支援プログラムの検討

プロジェクトメンバーと病院で看護職員研修企画を担当する看護管理者である専門家を交えた専門家会議により、研修企画支援に必要な内容を検討する。

### IV. 結果

#### 1. 「新人看護師教育担当者能力自己評価票」の信頼性・妥当性の検討

承諾の得られた160施設1030名に、調査票を郵送した。615票の回答があり、回収率は59.7%であった。回答者は、師長相当職が14.6%、副師長・主任相当職が58.2%、その他が27.1%であった。看護単位に所属する新人看護師数は、2人あるいは3人が最も多く、あわせて44.7%であった。



GSES 合計点は平均  $7.9 \pm 3.9$ 、標準化得点は  $47.0 \pm 9.9$  であり、回答した教育担当者の GSES はやや低い傾向であった。新人看護師教育担当者能力自己評価票の項目別にみると、**<全く実施できない>**、**<あまり実施できない>**の率が高い項目は、「苦言を相手が納得できるように伝えること」、「実地指導者の悩みをうまく引き出す効果的な発問」、「実地指導者を支援する場を組織の中でつくりあげること」、「医師に看護師の成長過程を伝え、理解してもらうこと」などであり、自己評価票の開発過程で得た結果と同様であった。

平成 25 年度は、以上のデータに基づき、「新人看護師教育担当者能力自己評価票」の信頼性・妥当性の検討を行った。

## 2. 研修企画者（教育責任者）向けの支援プログラムの検討結果

専門家委員として、産業医科大学病院の副看護部長、大松氏に参加いただいた。

研修内容の検討の前に、研修の前提として、以下が確認された。

- ・教育責任者は、新人看護師やプリセプター以外の看護部全体をカバーする研修企画を実施しているが、今回は、「新人看護師教育担当者育成モデルプログラム」を企画・運用するために必要な能力に焦点化する。
- ・研修の対象者は以下の 3 点を満たしていること。①組織横断的に活動が可能、②教育担当者研修の決定権をもつ、③教育担当者研修の企画・運営に意欲がある。
- ・研修の期待される病院における成果としては、教育担当者研修のプログラムをもつ病院では、もともとのプログラムと比較して、教育担当者の能力向上があること。ない病院では、新たなプログラム作成・導入ができること。
- ・教育責任者が研修を受けて、目標達成することで、教育担当者を育成することができ、新人看護師の能力向上につながる。

その前提のもと、以下の研修内容・方法が検討された。

### 【研修内容・方法】

#### I. 人材育成の基本的な考え方（講義）

- ・人を育てるとは
- ・成人教育理論
- ・CDP, HRD, キャリア開発
- ・教育責任者に必要な能力の自覚（セルフマネジメント、リフレクション、関係他者の理解、リーダーシップ、権限委譲、タイムマネジメント、自身を助ける資源の獲得・組織化等）

#### II. これまでの研修企画、自分の教育実践について振り返る（演習）

#### III. 教育担当者に必要な能力・モデルプログラム内容（講義）

#### IV. モデルプログラムを活用した研修を企画・実施するために必要な知識（講義・演習）

- ・組織の現状分析の方法
- ・自組織の役割・方向性の理解のための知識（医療・社会動向や政策等）
- ・研修評価方法（評価の役割、教育評価、費用対効果など）

#### V. 自組織の現状分析（フォーマットを提示する）（演習）

#### VI. モデルプログラムを活用した研修企画に向けた課題の明確化（演習・グループワーク）

平成 25 年度は、以上のデータに基づき、研修企画者（教育責任者）向けの支援プログラムの開発を行った。





- ・所属機関・地域の妊娠糖尿病の実態把握、関わる看護職の妊娠糖尿病の学習ニーズを把握する。
- ・妊娠糖尿病に関する教育支援の必要性と教育方法を検討する。教育支援では、平成 24 年度までに開発した母子健康手帳用継続支援記録用紙、リーフレットを活用する。
- ・教育支援方法の評価は、教育支援対象者の妊娠糖尿病に関する知識・関心の向上、継続受診率の向上、母子健康手帳の記載率とその活用内容によって行う。

#### (4) 結果

##### ①実態調査地域との結果共有と保健指導の変化の確認

平成 24 年度までに実態調査に参加した 1 地域に、調査結果を報告し、保健指導の変化の確認を行った。

妊娠糖尿病に限らず、母子健康手帳への妊娠中の検査データの記載が全体的に乏しく、母親の検査への関心も低いことが再確認され、中間報告時点でも認識された検査データに関心を高める支援の必要性を再確認した。

保健指導の変化では、中間報告以降、母子健康手帳の交付、受診券の交付自に検査項目の説明と検査への注意喚起が開始され、マタニティークラスのアンケート用紙の「その他」欄に「妊娠糖尿病のことを知りたい」と書いてくれた妊婦がいたことなどの変化が見られていた。保健師・助産師の認識も変化し、妊娠糖尿病について「何でもないと思っていた。」と反応する母親に対して、「怖がらせてはいけませんがチャンス。血縁関係に糖尿病の人がいないかなどの項目の情報提供しながら、関係づけて説明するようになった。」等の変化が報告された。また、尿糖が(++)となっても、医療機関で「何でもない」「大丈夫」と言われてしまうと、その後の指導が難しく、医療機関での指導を求める意見もきかれた。

今後の保健指導への活用では、妊娠中の尿糖検査の活用促進、成人の糖尿病教室時に妊娠時の尿糖のことを話題にして関心を高める等の計画が報告された。

##### ②リーフレットの活用と評価

実態調査の参加地域、共同研究者の関連機関等でリーフレットを活用してもらった。妊娠中の母親の関心の向上に向けて、指導説明時に使いやすいとの反応を得ており、指導にあたる保健師・助産師の認識の変化が最も大きく、積極的な指導へと変化があった。

妊娠糖尿病妊婦数は少なく、長期的な継続受診率の向上の確認が今後の課題である。

##### ③入院医療機関からの継続支援

1 病院から希望があり、現在、研究開始に向けて準備中である。

#### (5) 今後の課題

リーフレットの内容の検討、他の地域への拡大、入院医療機関からの継続支援数を増やすこと等が今後の課題である。

## プロジェクト3 看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究

### 1. プロジェクト研究員

共同研究員 大友 英子（東京大学医学部附属病院 国際診療部部長）  
西山 正恵（東京医科大学看護専門学校専任教員）  
池袋 昌子（池袋病院 看護部長）  
辻村 真由子（千葉大学大学院看護学研究科 講師）  
池崎 澄江（千葉大学大学院看護学研究科 講師）  
田所 良之（千葉大学大学院看護学研究科 助教）  
鈴木 友子（看護実践研究指導センター 特任助教）  
若杉 歩（看護実践研究指導センター 特任助教）  
大野 稔子（看護実践研究指導センター 特任助教）  
北池 正（看護実践研究指導センター センター長）  
野地 有子（看護実践研究指導センター 教授）

### 2. 研究の概要

国際的な医療環境の変化を受け、病院の国際化はアジア諸国では急速に進展がみられるが、日本は立ち遅れている。外国人患者や看護師を受け入れている病院も多いが、言語、生活習慣、価値観、社会背景の違いに対する戸惑いが多く、よい看護を提供しても誤解が生じ医療事故も危惧され、病院における看護職の文化的能力の教育と環境整備が急務である。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、医療通訳の整備なども進められてきているが、医療通訳の導入方法なども含めた、看護職の文化的能力の向上が求められてきている。そこで、本研究プロジェクトでは、現状を把握し、看護職の文化的能力の評価を中心にすすめる。平成25年11月より、科学研究費補助金を受け、実施している。

### 3. 本年度の成果

文献検討を継続して行い、フィールド調査としては、韓国および米国での病院および大学でのインタビュー調査を実施した。日本国内の病院での、外国人患者を受け持った看護師および、看護管理者へのインタビューを開始し、成果報告を行なった。それらは、「韓国の病院における外国人患者への対応の現状と課題：看護師の文化的能力のアセスメントツールの作成に向けて」日本健康科学学会第29回学術大会（東京 2013）、「韓国の看護系大学における学部学生の文化的能力を高める教育的取り組みとその背景」第33回日本看護科学学会学術集会（大阪 2013）であった。

また、研究方法と、能力開発および臨床応用のコンテンツの検討のために、国際会議を企画・運営した。「モース先生によるミックスド・メソッド国際ワークショップ」を平成26年3月8日（土）、「国際シンポジウム 看護職の文化能力～病院の国際化」を3月9日（日）に、千葉大学けやき会館で実施した。参加者は、全国の大学および病院からであった。

モース先生とスリサング先生のお二人からの具体的な講演と事例から、ミックスド・メソッド研究方法について明快に整理された。また、シンポジウムの内容は、以下のとおりであった。全講演後に、パネルディスカッションにより、さらに内容を深めた。

- ・基調講演 Janice Morse, RN,PhDs (米 ユタ大学教授)  
看護職の文化能力1 「ソルトレイクシティ冬期オリンピックの経験から」
- ・講演1 Lauren Clark, RN,PhD (米 ユタ大学教授)  
看護職の文化能力2
- ・講演2 Orasa Congtahn, RN,PhD (タイ コンケン大学准教授)  
看護実践に向けた異文化理解～理論から実践へ～
- ・講演3 Heeseung Choi, RN,PhD (韓国 ソウル国立大学准教授)  
看護学生の文化能力を高める取り組み
- ・講演4 Katsuko Tanaka, RN,DNP (米 ワシントン大学臨床准教授)  
看護師の文化能力を高める取り組み
- ・講演5 Jun Tanaka, PhD (医療健康資源開発研究所代表理事)  
服薬方法からみた異文化の課題～国際比較の事例から～

#### 4. 次年度の計画

国内外のインタビュー調査のまとめから、教育モジュールを開発し、文化能力のアセスメント結果と統合して、看護師の文化能力の能力開発・臨床応用について、CBPRにより実証的にすすめる。



#### 4) 国公立大学病院副看護部長研修

国公立大学病院副看護部長研修は、平成 18 年度から現在に至るまで、当センターの独自事業として実施している。研修開催に至った経緯は、国立大学病院看護部長会議からの強い求めに応じたことに端を発する。大学病院の看護部長をサポートする副看護部長に対し、上級看護管理者としてマネジメント脳力向上を図るための研修の必要性が求められた。「国公立大学病院副看護部長の看護管理研修に関わる実践的教育プログラム開発」に関する調査研究の成果を踏まえ、具体的な大学病院の副看護部長研修の実践的教育プログラムが開発され、平成 18 年度から具体的な実践を開始し、本年度で 8 年目を迎えた。

##### 1. 研修目的および目標

研修の目的は、我国の医療の現状を踏まえて、大学病院の上級管理者として自施設の組織変革に向けたビジョンを明確にし、その実現に向けた計画を立案・実施・評価することを通して、上級看護管理者として必要な実践能力を高め、大学病院の看護の充実を図ることである。

研修の目標は、次の 10 項目である。

- (1) 日本の医療を取り巻く現状を理解する。
- (2) 大学病院における組織のあり方を理解する。
- (3) 人間および人間関係を構造的に把握するための知識を得る。
- (4) 自施設の組織変革に向けた課題を構造的に把握するための方法を知る。
- (5) 自施設の組織変革に向けたビジョンを明確にする。
- (6) 効果的な企画立案技術を身につける。
- (7) 効果的なプレゼンテーション技術を身につける。
- (8) 自施設の組織変革に向けた課題を抽出し、関連情報の分析を通して実践計画を立案できる。
- (9) 他の医療施設における組織運営の実際を知り、自施設の組織変革に役立てることができる。
- (10) 関連部門の理解と協力を得ながら立案した実践計画を展開し、その成果について事実に基づき評価することができる。

##### 2. 研修の形態および内容

研修の対象者は、国公立大学病院副看護部長とし、これまでは副看護部長に就任後経験 2 年以内の者を優先して実施してきた。定員は 20 名である。

研修の特徴は、実践力を高めるために、研修期間を以下の 3 期に分けた分散研修方式をとったことにある。合計 12 日間で、受講料は 9 万円である。

研修 1：平成 25 年 6 月 10 日（月）～6 月 14 日（金） 5 日間

研修 2：平成 25 年 9 月 16 日（月）～9 月 20 日（金） 5 日間

研修 3：平成 26 年 3 月 3 日（月）～3 月 4 日（火） 2 日間

各研修の間の期間には、自施設においてより具体的な計画の立案や、その実施および評価を行い、その間にも、センター教員から継続した指導を得ながら、また他の研修生の大学病院を相互に訪問する他施設訪問により、比較検討しながら、実践力を高められるようシステム化されている。

研修の内容は、研修1では、医療政策、医療経済学、組織論・組織分析、教授システム学、医療倫理、病院経営、ストレスマネジメント、コミュニケーション・人間関係論演習、情報収集と分析に関する理論（方法論Ⅰ）などから構成され、講師は各分野の第一人者および本研究科の教員が担当した。

研修2では、情報収集と分析に関する理論（方法論Ⅱ）、課題抽出・分析演習、企画立案演習等、個人ワークおよびグループワークを組み合わせ、センター教員の指導のもと各自が実践計画の立案を行った。その他、組織変革のための評価学も含み、時代の要請に応えられるべく、研修内容の改善変更を継続して実施した。

研修3では、実践報告会を行なった。2日間にわたり、全員が自施設で実施した実践計画に基く実施結果および評価について学会形式で発表を行い、研修生、教員等との質疑応答により内容を深めた。この発表会での質疑応答を踏まえて、報告書を作成し提出となる。報告書は、研修生の同意を得て「教育 - 研究 - 実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援データベース」へ登録される (<http://www.np-portal.com/report/years/>)。

### 3. 研修の評価

研修の評価は、研修終了時にアンケートを実施している。アンケートは、倫理的配慮のうえ実施し、無記名で回答は自由意思による。研修終了時の全体アンケートは全員から回答があり、研修内容の評価では、役に立った項目は、「情報交換」「実践報告会」「他施設訪問」「講義演習」等であった。目標達成状況については、実践計画の展開と報告において若干名が「あまりそう思わない」との回答みたが、その他の項目においては全員が、「かなりそう思う」と「まあまあそう思う」であった。全国から集まった研修生との情報交換や他施設訪問、および実践報告会の内容については高い評価が示された。

自由回答欄からみると、

#### 1. 計画の立案や実施で受けた支援では、

「現場の声と組織が求めるものとのすり合わせに対し、いろいろな意見が聞ける場をもてたこと」

「実践計画の評価方法を数値で示すように計画案の段階でアドバイスを受けたことが良かった。」

「看護部内でのミーティングなどで相談した。」

#### 2. 研修Ⅱ～研修Ⅲを通して学んだことでは、

「問題・課題について、いかに周囲・関係者を巻き込み実践していくことが出来るかが、副看護部長として重要であると思った。実践・評価・結果をスケジュール管理（工程管理）してゆくことの重要性を学んだ。」

「報告会に向けて自分自身の実践を振り返り、評価することができた。通常の業務ではやりっぱなしで評価せずに終わることが多いので、今後は計画段階から評価方法を考えることの重要性を学んだ。」

以上まとめると、

公私立大学病院副看護部長研修では、医療看護政策に関する講義を省庁担当者より直接受講できること、看護管理やマネジメントに関する第一人者の講義を受講できること、演習を通して自施設の課題に

焦点化した実践計画書を作成し、計画書に基づいて主体的にプロジェクトを実施し、研修3の実践報告会で成果発表と情報交換を行うなどの研修プログラムを通して、全国の大学病院の副看護部長が一堂に会して受講できる全国研修のメリットとニーズが高いといえる。今後は、研修修了生が、本研修の学びを実践にどのように活かしているかについてフォローアップ調査を行い、研修内容およびシステムの更なる改善に取り組む予定である。

平成25年度国公立大学病院副看護部長研修時間割

【研修Ⅰ】

	I	II	III	IV	V
	8:50~10:20	10:30~12:00	12:50~14:20	14:30~16:00	16:10~17:40
6月10日(月)		10:00~ ※開講式 オリエンテーション	医療政策の動向 文部科学省 高等教育用医学教育課 大学病院支援室専門官 市村尚子	医療政策の動向 東京医科大学 教授 森山幹夫	
6月11日(火)	組織論・組織分析 慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 教授 花田光世		病院経営(財務管理) 兵庫県立大学 教授 小山秀夫	千葉大学付属図書館 亥鼻分館 ガイダンス・文献検索	
6月12日(水)	組織論・組織分析 千葉大学大学院 看護学研究科附属 看護実践研究指導センター 教授 野地有子	病院経営 (財務管理) 公益社団法人東京慈恵会 総合医学研究センター 医療教育研究部主任研究員 小路美喜子	コミュニケーション・人間関係論演習 産業心理コンサルタント 代表 箕輪尚子		
6月13日(木)	看護管理論(看護の質改善) NTT東日本関東病院 副看護部長 木下佳子		成人教育と教授システム学 日本BLS協会 代表 青木太郎	医療倫理 千葉大学大学院 看護学研究科 教授 手島 恵	
6月14日(金)	医療経済 東京大学大学院特任教授 東京大学医学部附属病院 企画経営部長 小池創一	看護管理者のスト レスマネジメント 千葉大学大学院 看護学研究科附属 看護実践研究指導センター 准教授 銭 淑君	情報収集・分析に関する理論・方法論Ⅰ 有限会社情報工房 代表取締役 山浦晴男	研修Ⅱに向けた オリエンテーション	

【研修Ⅱ】

	I	II	III	IV	V
	8:50~10:20	10:30~12:00	12:50~14:20	14:30~16:00	16:10~17:40
9月16日(月)	10:20集合 研修Ⅱ オリエン テーション	プレゼンテーション演習 千葉大学大学院看護学研究科附属 看護実践研究指導センター 教授 野地有子			企画立案演習 千葉大学大学院 看護学研究科教員
9月17日(火)	情報収集・分析に関する理論(方法論Ⅱ) 有限会社情報工房 代表取締役 山浦晴男		課題抽出・分析演習 有限会社情報工房 代表取締役 山浦晴男	医学部附属病院 見学研修	
9月18日(水)	課題抽出・分析演習 有限会社情報工房 代表取締役 山浦晴男				
9月19日(木)	企画立案演習 千葉大学大学院 看護学研究科教員	組織変革のための 企画立案 滋賀医科大学病院 看護部長 藤野みづ子	企画立案演習 千葉大学大学院看護学研究科教員		
9月20日(金)	課題抽出・分析演習 有限会社情報工房 代表取締役 山浦晴男		組織変革のための 評価(看護評価学) 豊野大学医療保健学部長 菅田勝也	研修Ⅲに向けた オリエンテーション 15:00終了予定	

【研修Ⅲ】 平成26年3月3日(月)、4日(火) 実践報告会

平成25年度国公立大学病院副看護部長研修 受講者名簿

番号	機 関 名	職 名	氏 名
1	北海道大学病院	副看護部長	高橋 久美子
2	群馬大学医学部附属病院	副看護部長	杉本 厚子
3	新潟大学医歯学総合病院	副看護部長	杉田 洋子
4	富山大学附属病院	副看護部長	山田 多香子
5	金沢大学附属病院	副看護部長	渡邊 真紀
6	福井大学医学部附属病院	副看護部長	江守 直美
7	名古屋大学医学部附属病院	副看護部長	若園 尚美
8	京都大学医学部附属病院	副看護部長	河合 優美子
9	岡山大学病院	副看護部長	内田 陽子
10	山口大学医学部附属病院	副看護部長	板垣 伸子
11	高知大学医学部附属病院	副看護部長	弘末 正美
12	九州大学病院	副看護部長	濱田 正美
13	佐賀大学医学部附属病院	副看護部長	中野 理佳
14	長崎大学病院	副看護部長	宮崎 智子
15	福島県立医科大学附属病院	看護部副部長	牧野 恵子
16	横浜市立大学附属市民総合医療センター	副看護部長 (外来調整担)	梅津 晶子
17	自治医科大学附属病院	副看護部長	上野 久子
18	慶應義塾大学病院	看護次長	山澤 美樹
19	昭和大学病院	看護部次長	吉田 雅子
20	聖マリアンナ医科大学病院	副看護部長	久永 加代子
21	関西医科大学附属滝井病院	副看護部長	榎本 良枝
22	川崎医科大学附属病院	副看護部長	平松 貴子
23	久留米大学病院	副看護部長	原島 光代



## 5) 国公立大学病院看護管理者研修

### 〔研修プログラムの変更について〕

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターでは、平成22年度より「教育－研究－実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発」プロジェクトを立ち上げ、組織変革の核となる人材育成支援プログラムの開発に取り組んできた。その一環として、「国公立大学病院看護管理者研修」では、これまで、課題プロジェクトの計画立案、報告を通じた能力育成支援を実施してきた。しかし、研修期間が長期に及ぶこと、得られた研修成果を社会に発信する取り組みが弱いことが課題となっていた。

この度、センターの研修支援体制が整備され、これまでの実績をふまえて短期間に凝縮した研修実施の見通しが立ったことから、平成25年度より、国公立大学病院看護管理者研修プログラムを以下の通り変更することとした。

従来分散した3つの研修で構成していた「国公立大学病院看護管理者研修」は、従来の〔研修1〕に相当するベーシックコースと、従来〔研修2〕〔研修3〕として実施してきた、自組織の組織変革課題を特定し、実践計画を立案・実施するアドバンスコースの2つの研修に分けて実施することとした。

ベーシックコースについては、例年通り、平成25年5月受講者募集、平成25年6月受講者決定、平成25年8月研修実施というスケジュールで研修を実施した。

アドバンスコースについては、平成27年度開講を目途に、平成25年度より研修プログラム開発のためのアクションリサーチ型共同研究を実施している。

## 平成25年度国公立大学病院看護管理者研修（ベーシックコース）実施要項

### 1. 目的

大学病院が、その特殊性を踏まえつつ、医療機関としての機能を十分に発揮し社会の期待に応えていくためには、医療事故防止、入院期間短縮、患者満足度の向上、ケアの質の維持・向上など、医療環境の変化に対応した複雑かつ重要な課題を組織的に解決していく人材の育成が不可欠です。中でも、様々な職種で構成される医療の現場において、人事管理の形態や内容の変化を予測し、時宜を得た適切な医療サービスを提供していくためには、看護師長等看護管理者の体系的な管理能力の開発が大変重要となります。

本研修は、看護師長等大学病院の看護管理者が、大学病院の特殊性を踏まえつつ看護管理上必要な基礎的知識を修得することを通して、大学病院の看護の充実を図ることを目的として開催します。

なお、**本ベーシックコースは、従来分散した3つの研修で構成しておりました国公立大学病院看護管理者研修の〔研修1〕に相当するものです。〔研修2〕〔研修3〕として実施しておりました、自組織の組織変革課題を特定し、実践計画を立案・実施する研修につきましては、アドバンスコースとして、平成27年度開講を目途に、現在研修プログラムを開発中です。**ベーシックコースの受講は、アドバンスコース受講の条件となるものではありません。

### 2. 主催・実施

看護学教育研究共同利用拠点

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

### 3. 後援

文部科学省

### 4. 研修期間・研修内容

平成25年8月21日（水）～8月23日（金） 3日間

大学病院の特殊性を踏まえつつ看護師長等大学病院の看護管理者として必要な知識を学びます。（研修内容は別紙1のとおり）

### 5. 会場

千葉大学大学院看護学研究科・看護学部（千葉市中央区亥鼻1-8-1）

### 6. 受講対象者

- 1) 国公立大学病院に勤務する看護職員で、看護師長相当の看護管理職にあり、原則として55才以下の方を対象とします。
- 2) 応募者自身が、本研修に強い関心と興味を抱いていることを条件とします。
- 3) 全日程参加でき、研修期間中は研修に専念できる方を対象とします。

## 7. 受講定員

80名

(定員を超えるご応募があった場合は、受講者を1施設1名までに限らせていただく等の調整を行うことがあります。)

## 8. 経費

本研修の受講にあたり必要となる往復旅費、食費、宿泊費等は、派遣施設及び受講者の負担とします。

## 9. 修了証書

研修修了者には、千葉大学大学院看護学研究科より修了証書を授与します。

## 10. その他

### 1) 本研修内容に関する問い合わせ先

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 教授 和住淑子

〒260-8672 千葉市中央区亥鼻 1-8-1

TEL : 043-226-2471

FAX : 043-226-2471

e-mail : wazumi@faculty.chiba-u.jp

### 2) 上記1) 以外の事務的な問い合わせ先

千葉大学看護学部センター事業支援係 (時田、久保田)

〒260-8672 千葉市中央区亥鼻 1-8-1

TEL : 043-226-2464

FAX : 043-226-2382

e-mail : tab5652@office.chiba-u.jp

## 〔国公立大学病院看護管理者研修 ベーシックコース〕

平成25年8月21日（水）～8月23日（金）3日間

科目	概要	時間
看護行政の動向	看護行政・政策について最新の動向を理解し、現在直面している医療現場での課題を広い視野でとらえ、考察する。	1.5
看護高等教育行政の動向	看護高等教育行政・政策について最新の動向を理解し、現在直面している看護の人材育成上の課題を広い視野でとらえ、考察する。	1.5
特別講義	看護界においてリーダー的役割を果たしている有識者の経験や知識に触れ、今後の看護職の役割発揮の方向性について考察する。	1.5
看護管理における文献の活用	組織変革に向けた看護管理上の課題を発見・解決するための文献活用の方法について学習する。	1.5
看護管理実践のリフレクション	リフレクション・フレームワークを用いて、自施設の現状を踏まえた自身の管理実践を記述し、その振り返りを小グループで行う。	3
看護管理におけるデータ活用の方法	自組織の持つ多様なデータを、看護管理に活用、解釈する方法について学習する。	3
大学病院をめぐる医療政策の動向	大学病院を取り巻く日本の医療の現状を理解し、自組織の役割及び、組織における自己の役割について理解を深める。	1.5
医療経営管理	医療経済について最新の動向を理解し、現在直面している医療現場での課題を、医療全体および病院経営の観点からとらえ、考察する	1.5
大学病院における地域連携	地域における大学病院の役割の理解を通して、切れ目のない医療を提供するための地域連携のあり方について、自組織の現状を振り返る。	1.5
計		16.5

\*太枠部分は、看護学教育指導者研修と共催の予定です。



平成25年度国公立大学病院看護管理者研修(ベーシックコース)  
時間割

	I	II	III	IV	
	9:00~10:30	10:40~12:10	13:30~15:00	15:10~16:40	
8月21日(水)	9:30~ 国公立大学病院 看護管理者研修 開講式 オリエンテーション	看護行政の動向  厚生労働省 医政局看護課補佐 加藤典子	看護高等教育行政 の動向 文部科学省 高等教育局医学教育課 看護教育専門官 石橋みゆき	特別講義 今、日本の看護職 に求められること 日本看護協会副会長 菊池令子	
8月22日(木)	看護管理における 文献の活用 千葉大学大学院 看護学研究科教授 酒井郁子	大学病院における 地域連携 愛媛大学医学部附属病院 TMSI医療福祉支援部責任者 青山百合枝	医療経営管理  奈良県立医科大学 教授 今村知明	看護管理におけるデータ活用の方法 (17:00終了予定)  千葉大学大学院看護学研究科准教授 小林美亜	
8月23日(金)	大学病院をめぐる 医療政策の動向 文部科学省 高等教育局医学教育課 大学病院支援室専門官 市村尚子	看護管理実践の リフレクション (講義) 千葉大学大学院 看護学研究科教授 和住淑子	看護管理実践の リフレクション (演習) 千葉大学大学院 看護学研究科准教授 黒田久美子	15:15~ 国公立大学病院 看護管理者研修 閉講式 (15:45終了予定)	

※太枠部分は、看護学教育指導者研修との共催になります。

平成25年度看護管理者研修 受講者名簿

番号	氏名	所属	番号	氏名	所属
1	本間 陽子	北海道大学病院	41	小山 猛	横浜市立大学附属市民総合医療センター
2	久保 千夏	旭川医科大学病院	42	加藤 直美	名古屋市立大学病院
3	古館 周子	弘前大学医学部附属病院	43	植田 範子	京都府立医科大学附属病院
4	伊藤 真弓	秋田大学医学部附属病院	44	木村 和美	和歌山県立医科大学附属病院
5	庄司 智子	山形大学医学部附属病院	45	伊藤 えり子	札幌医科大学附属病院
6	今井 裕子	群馬大学医学部附属病院	46	中村 美枝子	岩手医科大学附属花巻温泉病院
7	元吉 美津江	千葉大学医学部附属病院	47	竹花 茂祥	北里大学メディカルセンター
8	野村 恭子	東京医科歯科大学医学部附属病院	48	荒井 清美	埼玉医科大学総合医療センター
9	紺野 肖子	東京医科歯科大学歯学部附属病院	49	島野 愛子	埼玉医科大学病院
10	野上 順子	東京大学医学部附属病院	50	前場 富子	埼玉医科大学国際医療センター
11	戸川 紀子	新潟大学医歯学総合病院	51	林 信子	東京歯科大学市川総合病院
12	木本 久子	富山大学附属病院	52	小島 桂子	東京歯科大学水道橋病院
13	岩村 友恵	金沢大学附属病院	53	石川 秀一	日本医科大学武蔵小杉病院
14	斉藤 仁美	福井大学医学部附属病院	54	ギブソン 恵利子	日本医科大学千葉北総病院
15	小澤 和子	山梨大学医学部附属病院	55	大森 礼織	東邦大学医療センター大橋病院
16	村瀬 妙子	岐阜大学医学部附属病院	56	若山 真弓	東邦大学医療センター佐倉病院
17	本田 加寿子	浜松医科大学医学部附属病院	57	馬木 小夜子	東京女子医科大学東医療センター
18	姫野 美都枝	名古屋大学医学部附属病院	58	中嶋 真紀子	東京女子医科大学病院
19	濱口 栄子	三重大学医学部附属病院	59	瀬戸 智美	東京女子医科大学附属八千代医療センター
20	北川 有紀	滋賀医科大学医学部附属病院	60	川和田 博美	東京慈恵会医科大学附属柏病院
21	飯田 恵	京都大学医学部附属病院	61	山下 正和	東京慈恵会医科大学葛飾医療センター
22	川口 博美	大阪大学医学部附属病院	62	角田 真由美	東京慈恵会医科大学附属病院
23	外輪 美都里	神戸大学医学部附属病院	63	手塚 さつき	順天堂大学医学部附属順天堂医院
24	嘉本 賢哉	鳥取大学医学部附属病院	64	藍澤 真澄	順天堂大学医学部附属静岡病院
25	若槻 律子	島根大学医学部附属病院	65	石川 早苗	順天堂大学医学部附属順天堂東京江東高齢者医療センター
26	小野 佳子	岡山大学病院	66	田原 祥子	慶應義塾大学病院
27	中山 満誉	広島大学病院	67	佐藤 朋子	東京大学医科学研究所附属病院
28	吉村 久美	山口大学医学部附属病院	68	五十川 美恵子	東海大学医学部附属病院
29	野々瀬 美智子	徳島大学病院	69	生本 由美子	東海大学医学部附属大磯病院
30	阿部 慈	香川大学医学部附属病院	70	角田 博子	昭和大学横浜市北部病院
31	吉田 優子	高知大学医学部附属病院	71	神谷 恵子	朝日大学歯学部附属村上記念病院
32	眞弓 恵美子	九州大学病院	72	工藤 すみ	愛知医科大学病院
33	山口 真由美	佐賀大学医学部附属病院	73	加戸 聖美	近畿大学医学部附属病院
34	瀧本 洋子	長崎大学病院	74	西村 祐子	関西医科大学香里病院
35	牛島 輝美	熊本大学医学部附属病院	75	愛場 佐緒理	大阪医科大学附属病院
36	藤本 直美	大分大学医学部附属病院	76	西村 瑞穂	川崎医科大学附属病院
37	河野 直美	宮崎大学医学部附属病院	77	深川 直美	産業医科大学病院
38	芦谷 とし子	鹿児島大学病院霧島リハビリテーションセンター	78	押川 麻美	福岡大学病院
39	佐久川 廣美	琉球大学医学部附属病院	79	安部 緑	久留米大学病院
40	柴田 マツ子	福島県立医科大学附属病院	80	北川 りえ	久留米大学医療センター

## 平成25年度国公立大学病院看護管理者研修(ベーシックコース)評価アンケート結果

評価票の提出状況(受講生81名)

提出者 :80名  
回答率 :98.8%

### I

#### (1)受講者の背景

・施設 大学病院:76名 大学病院 歯学部:3名 回答なし:1名  
 ・役職 看護師長:71名 その他:3名 回答なし:6名  
 ・年齢 30代:5名 40代:40名 50代:33名 回答なし:2名  
 ・受講した研修 ファーストレベル:35名 セカンドレベル:6名 その他:4名 回答なし:17名 複数回答:18名  
 (2)受講動機 自分で希望した:13名 上司にすすめられた:67名 その他:0名

### II 評価及び結果

下表の各項目について、以下の4段階スケールで評価

項目	かなりそうである		まあまあそうである		あまりそうではない		まったくそうではない		回答なし	
	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
(1)全体を通して研修目標は達成できた。	29	36%	42	53%	1	1%	0	0%	8	10%
(2)全体を通して研修内容は役に立った	43	54%	29	36%	0	0%	0	0%	8	10%
1.「看護行政の動向」は役に立った。	36	45%	43	54%	1	1%	0	0%	0	0%
2.「看護高等教育行政の動向」は役に立った。	39	49%	40	50%	1	1%	0	0%	0	0%
3.「特別講義-今、日本の看護職に求められること-」は役に立った。	32	40%	42	53%	6	8%	0	0%	0	0%
4.「看護管理における文献の活用」は役に立った。	66	83%	13	16%	1	1%	0	0%	0	0%
5.「大学病院における地域連携」は役に立った。	16	20%	39	49%	22	28%	2	3%	1	1%
6.「医療経営管理」は役に立った。	52	65%	26	33%	2	3%	0	0%	0	0%
7.「看護管理におけるデータ活用」は役に立った。	43	54%	32	40%	5	6%	0	0%	0	0%
8.「大学病院をめぐる医療政策の動向」は役に立った。	57	71%	20	25%	0	0%	0	0%	3	4%
9.「看護管理実践のリフレクション(講義)」は役に立った。	52	65%	22	28%	0	0%	0	0%	6	8%
10.「看護管理実践のリフレクション(演習)」は役に立った。	48	60%	21	26%	0	0%	0	0%	11	14%
(3)全体を通して、本研修に参加した意義があった	59	74%	14	18%	0	0%	1	1%	6	8%

### III 自由記載

#### (1)研修に参加して学んだこと、考えたこと、感じたことについて述べてください。

- ・看護師長として3年目を迎え、日々の問題解決をする事で一日が終わるような状況でした。今回の研修を通し、頭の中が整理された部分があります。現場に戻り、明日から今年度の目標や病棟の活動計画を見直したいと思います。
- ・管理者として行政や教育の動向に目を向け、常に最新の知識を持って看護管理を行っていく事が求められている。幅広い能力を身につけるために今回の研修をきっかけとし、自己学習を深めるとともにスタッフにもわかりやすく伝えていくことが自身の課題と考える。現場を離れてリフレッシュすることが出来た。
- ・普段、業務に流され組織変革について考えていないことを実感した。思いつきで業務改善を試みてもスタッフに伝わらないのは計画性がない為だと思った。何故必要なのかスタッフに伝えるように説明していきたいと思った。
- ・「看護管理における文献の活用」はとても参考になったので良かったです。看護研究アドバイスをするため、又看護実践のための文献集め(一足制の導入)をした時のことを思い出しながら聞いたのですが、もっと早く文献検索計画を学んでおけばよかったですと感じました。今後の参考にさせていただきます。「東大病院での経営改革」の講義は、ペットコントロール上「空床」の意味が空いている部屋からこれから点数が増える部屋なんだという見方・考え方が加わりました。経営学の勉強不足も感じました。どの講師の先生方も熱心に講義下さいましたこと、感謝致します。



- ・看護行政の動向から大学病院の使命がよくわかった。
- ・18才人口を看護系にいかにするすめていくが「1日看護学生」さん等、もっともっと大切に貴重な体験となる様に努めたいと思います。
- ・新たな知識の習得も多々あったので、もう一度学習し是非活用したい。
- ・特別講義の内容についてはもう少し現場をふまえた内容を期待したいです。
- ・研修個々の講義もさることながら他大学の方との交流が有意義であった。PNSIについて話を伺いたいと考えていたのでホワイトボードに興味のある方を募り、先行している大学の「生の声」を聞いたことは目的の一つを達成できたことになり良かった。
- ・リフレクションの演習で自分の新たな課題が見えてきた。
- ・文科省や厚労省の方のお話がぼんやりしていた日本の医療の行方や診療報酬の改定などの関係がよくわかりました。看護全体にまとまった内容だったと思います。リフレクション、グループワークも刺激になりました。
- ・看護研究指導について、理解しているつもりでしたが、改めて気づくことが多く、大変勉強になりました。
- ・データの活用については今まで出していた方法が間違っていたことに気づけても良かった。職務満足度について平均で出しているが、信ぴょう性について問題提起しようと思いました。
- ・日々業務に追われ動向などあまり考えることがなかったが、今回の講義を聴いてそれではダメなのだと思い知りました。
- ・物事の考え方が整理できた気がします。
- ・医療の動向と政策-看護教育-医療現場の関連が理解できました。
- ・現場に戻って見直すべき事項のイメージと方法が理解でき、実践に即役立てられそうです。中央部門で働く身にとって多職種との連携やエビデンスベースの重要性とその示し方がとてもよくわかりました。どの授業も楽しく素晴らしいです。3日間とても充実していました。ありがとうございました。
- ・看護師として行政の動きにアンテナをめぐらし、一歩先行く“管理者”としてスタッフの成長を助けていくことが使命と改めて学ぶことができた。
- ・部署の問題について自分で考え分析した内容をもう一度分析し直すための視点が得られました。
- ・自施設の看護部が進めていること、そして現場の師長へ依頼されることの裏付けをすることが出来ました。日頃、やらされている感が強かったのですがやっている事の必要性・重要性を知り、改めて師長の役割を再認識しました。
- ・看護管理の基礎を再考でき、今後の実践に役立てていきたいと思った。又、行政の動向を知る事ができ看護管理者として現場で行っている・行っていないかなければならないことの根拠が分かり、もっと頑張っていかなければならないと強く思った。
- ・自分の課題が明確になった。
- ・文献の活用、看護管理におけるデータ活用の方法・リフレクション・医療行政の動向、とても参考になりました。
- ・実習に来る看護学生への指導について、スタッフとも再度考え直さなければならない。
- ・日々の看護管理、特に大学病院における看護師長の役割を考えるよいチャンスとなってよかった。
- ・どの研修内容も取り組んでいる過程であるので大変参考になりました。なかでも「看護管理における文献の活用」は基礎から教えて頂いたので活用したいと思いました。
- ・日本の社会情勢に国の方針をよく読み取り何をしなければいけないのか、管理者として施設の理念を振り返り整理していく必要を痛感させられました。
- ・設問1.2.3.6.8に関しては立場の違う方から国の現状や問題などを聞くことが出来、大変役に立ちました。政策によって自病院の対策も変わってくるので、今後も情報を知る必要がある。
- ・設問5 当大でもここ数年地域連携の活用が拡大している。これからの医療の現場を考えると、業務の拡大も必要になってくるので参考にしたい。
- ・設問4.7 日常でデータ収集をしておくこと。急に研究に取り掛かることは難しいこと。研究は特別なことではなく、臨床の現場には課題は沢山あり、データ化しておくことの重要性を学んだ。
- ・設問9.10リフレクションについて初めて知りました。今後活用できるよう身につけていかなければならないと思った。
- ・今回研修で学んだことを実践していくことで研修の目標達成につなげていきたい。
- ・講義の中で繰り返し伝えていることが大切なことだと感じ、これからも頑張っていきたい。ありがとうございました。とても勉強になりました。
- ・自組織だけでなく、国政など広い視点でデータをみることの重要性を学びました。全国から集まった師長さん達との情報交換はとても励みになりました。
- ・普段、考えていることを行動や実践に向けての意識づけになった。課題が明確になり根拠をもって実践することを再確認できた。講師の皆さんの熱意に圧倒されました。ありがとうございました！
- ・まず看護がおかれている現状を再認識することにより、今後自身が勉強すべき方向が少し見えました。
- ・社会環境の変化に対応した政策を理解し、看護師としてのあり方を学んだ。リフレクションに関しては新人教育において必要性を感じており、手法を学ぶことができて大変勉強になった。リフレクション体験については時間がなく、やや不消化に終わった。
- ・データの活用、分析について
- ・研究について
- ・1日目の受授は内容がかなり重複していたので事前の調整があってもよかったと思う。どれもとても貴重な内容だったので時間的にも、もったいない印象をうけた。
- ・臨床・教育・研究としての大学病院の役割で教育の面でもっと力を入れていかなければならないと思います。臨床の場を安定させることが精一杯ですが、スタッフや学生の次世代を育てていかなければならないと医療の現場が今後厳しくなることを痛感しました。
- ・大学病院が医療界を引っ張っていく役割があると講義で言われ、あたりまえのように行われていることが他の病院に伝えていくことの重要性を感じました。
- ・自らの看護管理実践をリフレクション演習を通し客観視することで何となく結果を出す・・・というあいまいな行動からミッションを明確にして組織貢献と専門職者として学び続けていく大切さを実感した。今回の学びをもとに日々の実践をプロセスレコードで可視化し管理的要素の意味・実践～看護の意味を考えながら実践していこうと思う。
- ・今回学んだことは私の勤める病院でも同様に起こっていることなので、今回の学びを活かしていきたい。また、多くの大学病院から集まった方々との交流は学びにもなり、勇気もらった気がします。多くの看護師に伝えていきたい。
- ・聞いたことがある程度だったことが、うわさや自己解釈ではなく事実として知ることができるようになった。井の中の蛙ではなく、日本の中の自分の病院をみつめる機会になった。
- ・日常の業務の中で今回の研修で学んだことを考えつつ、マネジメントすることで研修前と少し違った自分に気づくことができた(又は誰かに言われたら)3日間の研修の意義があったと思います。
- ・わずかに3日・されど3日、わずかに1時間30分・されど1時間30分、熱い講義をして下さった講師の先生方に改めて感謝です。ありがとうございました。
- ・日本全体の動き、看護の動きをみて看護管理していく大切さを学びました。目先のことだけにとらわれることなく、師長としての役割を果たしていこうと思いました。
- ・看護管理を幅広い視点で見直すことができた。国が抱える問題や大学病院の担う役割について理解できた。
- ・研修の時間が短かったように思えました。とても興味深い内容が多かったので、もう少し時間があってもいいように思えました。
- ・看護研究・データ活用等、今後行っていく上でとても役に立ちました。今年度取り組んでいきたいです。
- ・国の動きについて勉強になりました。今後活かしていきたいです。
- ・現在の日本の状況・看護・教育・医療の動向は今後の医療や日本を見据えて今何をしたらいいか考えるためにとても重要な情報です。もっとスタッフに



- 伝えて共に行えることを実践していきたいと思いました。
- リフレクションでは問題が別のところにもあることを気づいたので有意義でした。時間が足りなかったですが、今後に生かしたいです。
- ・自分の不足していた部分が明確になった。
  - ・看護学生を育て、新人を育て、離職させないことが今後大切になってくること、自分自身にもできることであると感じた。
  - ・初日の講義に関しては学会、他の研修会などで知る機会を得ていたため、今回は基盤となることとして再度勉強させていただいた。2日目の文献の活用データ活用は実践できそうなレベルまで細かく講義していただいたので、今後活動につなげたい。
  - ・参加者同士での情報交換もとても参考になる事が多かった。
  - ・毎日毎日の目の前の様々なことをもう少し根拠をしっかりと、また考え方を変えてみることでもう少し効果的な結果が出来ることを考えさせられた。そしてもう少し皆が元気に働くための私の考え方の修正の仕方の方向が見えた気がします。
  - ・自部署や院内の問題にとどまらず、社会的背景や求められる看護の役割について考えることの大切さを学びました。
  - ・目の前の業務に追われ、看護管理についてじっくり考える機会がなかったのですが、今回の研修を受け管理者として社会の流れを知り、自ら情報収集し学んでいく必要性を感じました。
  - ・3日間業務を離れていい時間が過ごせました。行政のことから教育までこれから自分がどう考えていけば良いのかまだまだ勉強しなければいけないと感じる事ができました。
  - ・自分の信念を表現できる手法を身につけて実践すること。人の意見をよく聞くことは大事だが、ぶれないようにすること。
  - ・看護管理者として日々の業務の中ではなかなか学習することの出来ない内容についてゆっくりと勉強する機会を頂けたと思います。他大学の師長さん達との情報交換の機会も得られ良かったです。
  - ・データ化、可視化する事の効果・必要性。
  - ・看護行政の動向と課題。
  - ・今回の研修はほとんど座学であり意外な感じがしたが、今現在おかれている看護の状況、師長としてやらなくてはいけないことなど国のレベルなどで講義して頂き大変ためになった。
  - ・医療環境の変化を捉え、文科省や厚労省・看護協会が示す方向性がよくわかった。師長としてのマネジメントとして事実をとらえ、分析し改善していくことの重要性を理解した。なんとなく捉えていたデータの意味や活用について考える機会となった。
  - ・自病院だけでなく連携の重要性がわかった。
  - ・全ての講義が刺激となる、又自分が得たい情報・知識が講義・出席者間と話すことで学び多い研修となりました。本当にありがとうございました。
  - ・何を問題・課題とするのかという視点においても、自分の視野の狭さを痛感しました。国や今後の社会の動きを見据え、また理念に立ち戻って自分の役割を考えていきたい。
  - ・これまで管理者として持つべきスキルが不足していたことを改めて反省した。スタッフを正しい方向へ導いていけるよう文献やデータも活用していけるよう頑張りたいと思う。なにより役に立つ管理者になりたいと思った。
  - ・管理者として学ぶ事は「国民の生活を守る」という意識づけになった。
  - ・管理者として学び続ける大切さとミドルマネージャーには日本全体を視野に入れ、単なる管理ではなく知識創造のリーダーとして人脈や関係性を育む能力が求められていることの再確認が出来ました。
  - ・実践知識や教養を身につけて知識創造のプロデューサーになることが必要である。
  - ・今まで曖昧なまま行っていたことが研修に参加したことで根拠を捉えることができた。今後は活用していかなければならないと思っている。
  - ・附属病院の役割・特徴を学びました。当病院も7:1体制をとると同時に人材の教育課程の違いから生じる質の低下を実感しています。人材確保のためにはやむを得ないとしても質の向上・質の維持のために今自分の存在が影響すると改めて明日からの行動に責任を持たせて頂きました。時として経験値で話を進めようとするところをきちんとしたデータから進めていく、経験だけで物を述べない、今までの経験+研究で自分を変え、今後の看護教育に努めたい。
  - ・行政の動向や大学病院をめぐる政策の動向については日々意識的に情報を得る努力と自分自身が担う役割であるという認識が不足していたため、改めて必要性に気づかされ反省している。看護管理者として達成すべく目標は組織や社会に求められている各stepであるため、手段・方法として今回の研修で学んだデータや文献を活用していこうと思う。又、自分の看護管理実践をリフレクションする演習方法を用いてつなげていこうと思う。
  - ・看護管理の中で学生教育のあり方が重要な要素であることを知り、改めて大学病院の果たすべき役割の重要性を感じた。
  - ・看護実践におけるリフレクションの重要性を学び、正しくリフレクションを行えるよう知識・技術を磨いていく必要性を感じた。
  - ・管理者として同じような問題を共有でき、今後の改善策のヒントになりました。
  - ・日本を取り巻く今日の状況の中での大学病院の社会的意義や看護管理者への期待と役割の大きさを改めて知る事が出来た有意義な研修でした。
  - ・また、同じ大学病院の看護管理者としての立場にある研修生同志、お互いの現状や悩みなど共有しあえたことも今後の大きな励みとなりました。
  - ・自部署に戻り、この研修での学びを組織の充実のもとより、発展に活かせるよう一層努力していきたいと思っています。ありがとうございました。
  - ・日本の医療の現状や社会情勢、同じ立場で看護に携わる方々との交流を通して視野が広がりました。
  - ・自分の姿勢が職場に影響を及ぼすことを重視し役割を果たしていきたいと思いました。ありがとうございました。
  - ・看護管理者となって3年目であり、日頃の管理方法を振り返るとデータを活用して根拠に基づいた管理を行うレベルに達していなく、その知識を学ぶ事が今回の研修の目的でした。実際の研修では(データの活用方法)資料がとてもわかりやすくとても参考になったのですが、途中から統計の内容へと進むにつれて難しく感じました。まだ講義の内容を全て理解し現場で生かせる状態ではないため、上記項目はBとしました。資料を熟読したいと思えます。(文献の活用の講義に関しても同様です)
  - ・まず、自施設の特異性・問題・課題が自分の中ではっきりしてきた。また自分の果たすべき役割・課題も明確になった。(自分の弱点がより見えた)
  - ・この研修において様々な知識を学び、今までの管理者としての振り返りができた。
  - ・B評価の部分に関しては日看協総会などで一応理解ができていた項目であった。
  - ・大学病院の師長に求められる役割・課題・期待と現状のギャップが非常に大きいと思った。できることから1つずつ実践していこうと思う。
  - ・今なぜ師長に大学院進学をすすめているのかという意味が理解できた。→来週末受験日です。前向きに頑張ります。
  - ・管理者としてやらなければならないことを改めて提示してもらった気がした。体系的に学ぶ機会を今まで持ていなかったことに改めて気づいた。今後それをどのように実践していくかは自分自身が本気にならなければできない。
  - ・研修で学んだこと・感じたことをどう現場で活かしていけばよいのか、いつも現場に戻った時に戸惑う事が多かったがリフレクションを学ぶ事で地に足のついた思考ができると思えた。
  - ・大学病院を取りまく環境や求められているものが改めて理解でき、その役割の重要性が理解できた。
  - ・自施設で何を取り組むべきか改めて考える機会となった。
  - ・看護師(特に管理者)は色々な世界を見て見聞を広げる事が重要。何にでもチャレンジしていく勇氣が必要。自分のしている仕事は目の前の問題に取り組むだけの事のように見えて実は看護そのものの発展につながったりしている。すてきな仕事だと改めて感じた。休み時間に職場に「変わりない?」とTELLしている師長さんがたくさんおられました。自分は任せっぱなしだなぁと思ったり、その方々も研修に集中できると良いなと思ったりしました。
  - ・看護を取りまく社会情勢を踏まえ、今だけを見るのではなく将来を見据えた対応をしなくてはならないことを再認識した。このことを踏まえ、職場環境の改善、スタッフ教育をしなくてはならないと感じた。また現場から離れ研修を受けたことで、日々取り組んでいることの意味を考えたり自分の実践を振り

- ・返るよい機会となった。受講した内容を現場で活かし、目標のチーム作りや看護の提供に役立てたいと思う。
- ・トイレがきれいでした。環境調整ありがとうございました。
- ・管理者としてどのように関わっていったらよいのか(スタッフと)勉強になりました。
- ・最新の情報を提供して頂き常に情報を取り入れるよう努力したいと思います。学びを復習して整理し、今後に活かしたいと思います。
- ・他施設の方の抱えている問題を共有できたことは有意義でした。
- ・「大学病院の師長」というかなり近い立場の方々とお話しできる貴重な機会であった。現場での問題についてもっと意見交換できる時間が欲しい位であった
- ・全体的に浅かった知識が深まりました。

(2) 本研修を今後さらに充実させていくためのアドバイスや意見

- ・休憩時間が長いので、少し短縮して研修が早く終わるよう配慮して頂ければ嬉しいと思いました。
- ・研修がスムーズに実施出来るよう様々な面で丁寧に対応して下さい、本当にありがとうございました。グループワーク等あれば様々な施設の方と交流が持てると思います。3日間は短いので5日間程度で企画をお願い致します。
- ・同じ内容の講義があり、又看護協会でも聴いた内容と同じであり残念でした。対象の受講生が年齢が高いので、文字が大きいフォントであると助かります。印刷が薄いレジメは見えにくくて残念です。リフレクション演習は短かったが面白かったです。
- ・動向も大変貴重ですが、管理として人材育成の具体的場面が知れたらと思います。
- ・1日目の講義内容で重複していると感じた内容がありました。貴重な時間だと思うので…あまり好ましくないと…(多少であれば仕方ないと思うのですが)
- ・資料をただ読むといった講義はやめていただきたい。講師の意見や考え、現状を盛り込んだ内容をお願いしたい。(特別講義)…自分の意見がない(現状を把握してないと質問にも解答できないと感じた)
- ・「データ活用」の資料が印刷が薄く、読み取れない部分が多かったのが残念だった。
- ・55才の年齢制限やめていただけませんか。
- ・臨床で日々忙しかついているとデータの活用等あまり考えていません。もう少し時間をとってもらえると良いと思いました。
- ・文献の活用やデータの活用方法などを演習してみたいと思いました。
- ・ネットワーク作りをするにはなかなか困難を感じた。どうしても隣近所の方だけに限りがちだった。(自分の努力も必要だと思うが)
- ・3日間のうち、毎日午後の90分はグループワーク(毎日違うグループ)ができる様にすると良いかもしれないと思った。
- ・医療経営についてももう少し時間があればと思いました。
- ・グループワークがもう少しあると他施設の師長さんの情報をもっと入手できたかと思えます。
- ・資料をもう少し見やすくしていただけると助かります。
- ・この研修を続けてほしいと思います。大変ありがとうございました。
- ・市村専門官の講義をもう少し聴講したかった。どの分野も基本的事項についての説明もあったので知識の整理になった。
- ・演習をもう少し入れてもらいたかった。
- ・研修内容が多くあり、時間が不足していた。演習が増えたと交流ができてよかった。
- ・リフレクションの演習で先生方がアドバイスを頂きスムーズに進行しました。ありがとうございました。
- ・「看護管理におけるデータ活用の方法」もう少し時間があつたらゆっくり聞けたなあと思う。まだまだ理解できることがあるのでは?と思った。
- ・研修生間の情報交換をする場(時間)がもう少しあっても良いと思いました。ホワイトボードでの意見交換はとても貴重なものとなりました。
- ・全国から80名もの師長さん達が集まる場はそうそうないので、とても良い経験になりました。ありがとうございました。
- ・1日目の講義の内容が重複していることが多かった。
- ・リフレクションについては学んでみたい内容だったので、とてもタイムリーでよい授業であった。
- ・短い時間ではあつたが、メンバーと問題を共有することで自分が抱えている課題が明確になった。また違う方向性からメンバーの助言があり、新たな問題点にも気づかされた。
- ・重複するデータを整理し、別の講義の時間に費やしていったほうがよいかと思いました。
- ・参考資料が一部見えにくかったものがある。
- ・参考文献等の紹介があるとよかつた。(特に現場の状況をデータ化する…というコマで感じました)HP等で教えて頂けると助かります。
- ・リフレクションは有意義です。
- ・事前学習もなく参加してよいのかと当日まで不安でしたが、でもとても助かったのは事実です。
- ・今、初めてお会いした人とこんなに話せるのは同じ悩みや境遇にあるため、すごく楽しく有意義な研修をさせていただいたと思います。充実感いっぱい帰ることができます。お世話になりました。
- ・資料をカラーにしてほしい。全部2ページ分/1枚にしてほしい。
- ・⑦においては2コマほしい。(興味があつたので時間が足りない)
- ・もっと他大学の師長さん達と交流する時間が欲しかつたと思ひました。(グループワーク、交流会etc)
- ・5.地域連携については短い時間でも良いかと思ひました。データ活用の方をもう少し時間が欲しかつたです。
- ・リフレクションに関しては実践計画まで考えられるとずっと達成感と自信につながるようにも思ひます。
- ・限られた時間だと思ひますが、もっと個別にもアドバイスがもらえるとう良かつたです。
- ・3日間でいかに他大学のみなさんと話したりするかなかなか難しいので、今回のごはんの企画もそうですがグループではなくみんなでできるものがあると良い。
- ・限られた時間の使い方は管理において大事な要素ですが、演習はもう少し時間が欲しいと思ひました。
- ・2日目の退院支援については管理者研修としては実践報告がほとんどだったので、少し期待はずれではありましたが。
- ・3日間という時間の制約があるので、集約できるテーマ(人口動態等)はまとめた方がよい。
- ・一部資料の字が細かく読みづらかつたです。
- ・色々ありがとうございました。資料も見直し生かしたいと思ひます。可能であれば印刷した時にわかりやすい色の方が助かります。(気づいたのは一部ですが)
- ・内容がとても深いものだった。しかし各項目とも時間が短く、最後まで聞けないものもあつたので大変残念だった。
- ・リフレクションの演習は具体的な説明をしてほしかつた。途中で終了した感じであつた。

- ・1～4の重なる内容が多かった。繰り返によりよく理解できたし、厚労省・文科省・看護協会という立場の違いからどう課題を捉え、対策を立てているのかがわかったが、重なる部分を減らして講義内容を強調していただくとさらに良いと感じた。
- ・もう1コマ位演習があると良いと思いました。(色々な方と関われるので)
- ・リフレクション演習のための時間はもう少しあるとありがたかった。
- ・実務でつかえるフレームワークを充実させてほしい→文献の活用やデータの活用方法、リフレクションはすぐにでも活用できる(実践できる)内容であった。
- ・研修期間としては3日間は良い。
- ・実践的に活用させていただきます。ありがとうございました。
- ・受講生間のコミュニケーションをもっと図れる企画があるともっと良かったと思いました。短時間でたくさんのことを学ばせてもらったので時間的に難しいかもしれませんが…。
- ・「データ活用方法」や「文献の活用」は実践においてとても参考になる内容であったため、午前中いっぱい時間を取るなどして時間を増やして頂けたらじっくり学べると思いました。
- ・演習を増やす。
- ・講師の先生方とのディスカッション
- ・情報交換をするのに番号だけでも大きく表示され名札でわかると接しやすいです。
- ・PCやホワイトボード、様々な配慮をして頂きありがとうございました。
- ・最終日のリフレクション(演習)はもう少し時間があると良いなと思いました。
- ・小さい字の資料は大きくしていただけたら、後で整理し復習する例に良いと思いますのでお願いしたいです。
- ・大学の講師の研修を多くしてほしい。
- ・実践報告レベルではなく、講義を多く取り入れることで知識がより深まります。



## アドバンスコース開発に向けたアクションリサーチ型共同研究

### 【研究テーマ】

組織変革型看護職育成を支援する研修プログラム開発に向けたアクションリサーチ型共同研究　－病院看護師長が取り組む組織変革に焦点をあてて－

### 【背景】

医療の高度化、生活の多様化に伴い、看護職の継続教育環境は厳しい状況にある。従来の個人の能力向上を目指す研修では、開発された能力の組織における活用、組織の問題解決まで達成が困難なため、千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターでは、「教育－研究－実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発」プロジェクトを立ち上げ、組織変革の核となる人材育成支援プログラムの開発に取り組んできた。その一環として、集合型の研究において課題プロジェクトの計画立案、報告を通じた能力育成支援を実施してきたが、研修期間が長期に及ぶこと、得られた研修成果を社会に発信する取り組みが弱いことが課題であった。しかし、これまでの実績をふまえて短期間に凝縮した研修実施の見通しが立ったこと、看護実践研究指導センターの研修支援体制が整備されたことから、受講者と看護実践研究指導センター教員が共同研究を通して研修成果を社会に発信することを目指して、平成 25 年度より研修事業の実施体制を見直すこととなった。

本研究は、病院看護師長が取り組む組織変革に焦点を当てたアクションリサーチを、看護実践研究指導センター教員との共同研究により実施し、新規研修プログラムの開発につながる成果を得ることを目的とする。

### 【研究目的】

- ①病院看護師長が取り組む組織変革課題を明確化し、その改善策を計画、実施、振り返り、評価・修正を行う。
- ②課題に取り組む過程を通して、教育－研究－実践をつなぐ（理論と実践を往還する）組織変革に必要な看護職の能力、育成支援の必要性を明らかにする。
- ③以上を元に、組織変革を推進する看護管理者研修の研修プログラムを開発する。

### 【研究方法】

#### 1. 研究参加者および研究者

自部署に何らかの組織変革課題をもつ病院看護師長であり、その課題解決に取り組む過程を通して研修プログラムを開発するという本研究課題に共同研究員として応募した者

#### 2. データ収集方法

##### 1) データ収集期間

2013年7月1日～2014年3月31日



## 2) データ収集方法

研究進行予定（図1）を元に、組織変革課題の解決に向けた実践を遂行する過程において、研究メンバーのミーティングを開催する。ミーティングにおいて、実践過程において生じた困難やその困難に対する支援の内容、困難を乗り越えるために必要な能力とその能力向上に関与した要因等について、振り返りや意見交換を行う。ミーティング内容は許可を得て録音し、後に逐語録を起こす。

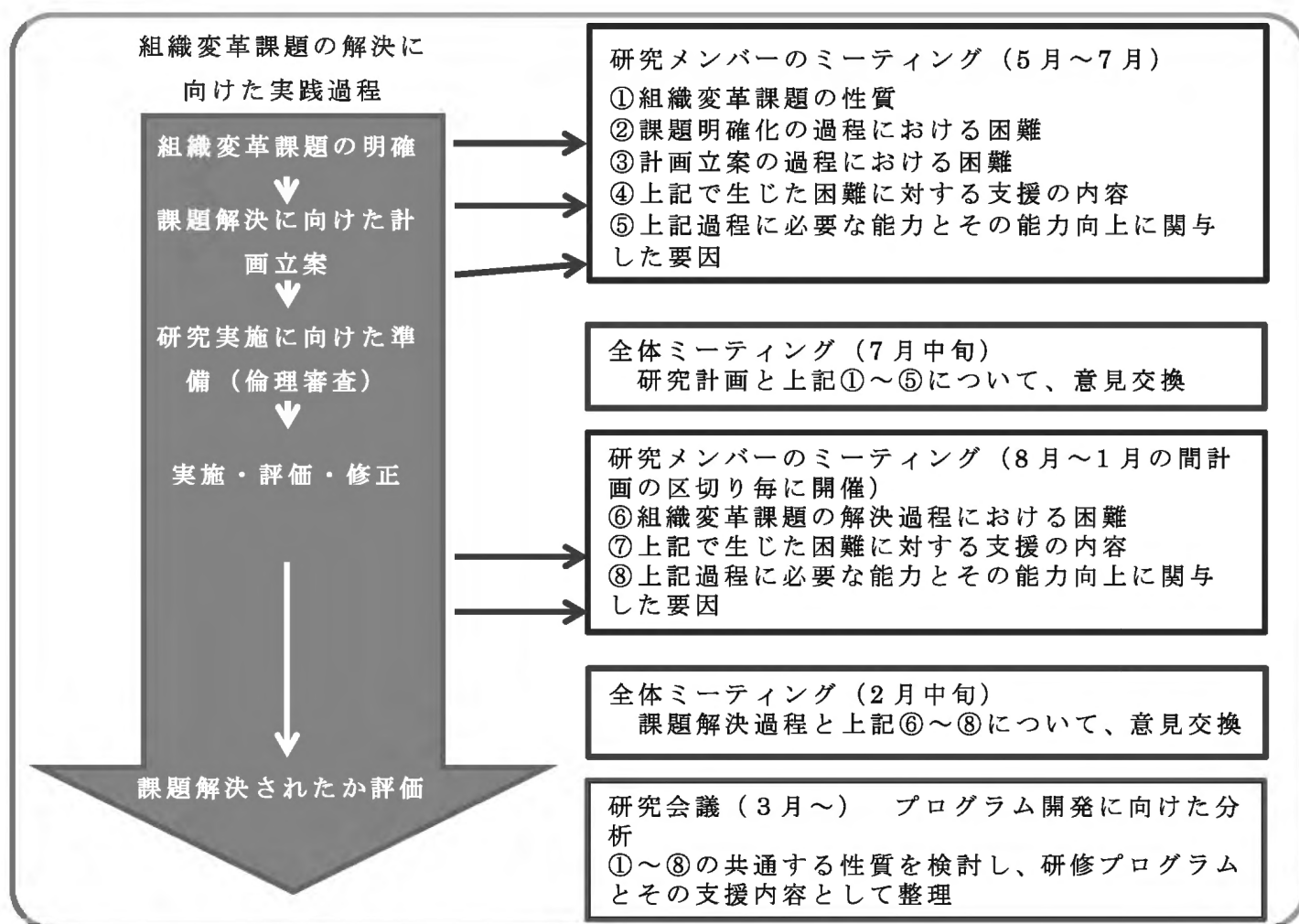


図1 AR型共同研究（看護管理者版）の進行予定

## 4) データ収集の手順と留意点

共同研究員である看護師長が所属する施設の看護部長に書面の郵送にて協力依頼をし、同意書の返送をもって同意を得る。（資料1）

看護部長の承諾後に開催されるミーティング時に、共同研究員の許可を得て、ミーティングを録音する。ミーティングは、大学や共同研究員の所属する施設内のカンファレンスルームなど、プライバシーが確保できる場所にて行い、一人で

も参加者の許可が得られなかった場合には録音はせずに、メモを取ることで対応する。

なお、看護師長が取り組む組織変革課題解決に向けた実践過程に必要な倫理的配慮に関しては、各所属施設の倫理審査委員会での審査を受けることとする。

### 3. 分析方法

#### \* 個別分析

- 1) ミーティングの語りの逐語録から、課題解決に向けた実践過程を振り返っている発言を、内容のまとまり毎に選択する。
- 2) 選択した発言を、以下の8つの観点に照らし、似ている発言をグルーピングする。  
①組織変革課題の性質 ②課題明確化の過程における困難 ③計画立案の過程における困難 ④課題明確化・計画立案の過程で生じた困難に対する支援の内容 ⑤課題明確化・計画立案の過程に必要な能力とその能力向上に関与した要因 ⑥組織変革課題の解決過程における困難 ⑦組織変革課題の解決過程で生じた困難に対する支援の内容 ⑧組織変革課題の解決過程に必要な能力とその能力向上に関与した要因
- 3) グルーピングされた発言の共通性を検討し、その意味内容を抽象化する。

#### \* 全体分析

個別分析の結果から、①～⑧の共通する性質を比較検討し、研修プログラムとその支援内容として整理する。

### 4. 倫理的配慮

- 1) 千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認後に開始する。
- 2) 研究参加者に対して、研究の目的・方法や、個人のプライバシー保護、守秘性や匿名性の保証、得られた結果は本研究以外には活用しないことを説明する。
- 3) 研究の途中での辞退が自由であり、辞退をしても何ら不利益を被ることはないことを説明する。
- 4) 病院看護師長が取り組む組織変革課題の解決に向けた実践過程の折々に開催されるミーティングの内容を録音すること、録音内容は、逐語録として再現するが、その際に個人や施設名が特定されないよう記号化することを説明する。また、既に開催されたミーティングに関しては、議事録作成のために録音した内容や議事録の記述内容をデータとして扱うことを説明する。
- 5) 研究成果は学会発表や論文として公表し、研究終了後、研究成果をセンターのホームページ上に掲載予定とし、成果の活用をもって研究協力への御礼とすることを説明する。
- 6) 以上2)～5)に関しては、倫理審査後に開催されるミーティングの中で改めて説明する。なお、対象者は既に共同研究員という立場にあることから、確認の意味での口頭説明にとどめ、依頼書・同意書は作成しない。

【共同研究員】

山田典子（東京大学医学部附属病院）

石川ひとみ（秋田大学医学部附属病院）

菊田直美（千葉大学医学部附属病院）

比田井理恵・大坂美穂・北澤和子（千葉県救急医療センター）

【平成 25 年度の実施状況】

共同研究員それぞれの組織変革課題の解決に向けた実践を行いつつ、全体ミーティングを 3 回実施し、

- ①組織変革課題の性質
  - ②課題明確化の過程における困難
  - ③計画立案の過程における困難
  - ④上記で生じた困難に対する支援の内容
  - ⑤上記過程に必要な能力とその能力向上に関与した要因
  - ⑥組織変革課題の解決過程における困難
  - ⑦上記で生じた困難に対する支援の内容
  - ⑧上記過程に必要な能力とその能力向上に関与した要因
- について、情報収集を行った。

## 6) 看護学教育指導者研修

### (1) 研修目的

本研修は、臨地実習施設等において看護学生の看護実践を直接指導する看護学教育指導者である看護職が必要な能力を高め、臨地と基礎教育機関の連携・協働の充実に資することを目的とする。

平成 21 年度までは文部科学省委託事業として、平成 22 年度からは「教育－研究－実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発プロジェクト」の一環として実施してきたが、短時間で凝集した研修内容の見通しがたち、また実践計画の立案や成果のまとめについてはさらなる支援の強化が求められることから、平成 25 年度からは、①ベーシックコース、②アドバンスコース（臨地実習における課題解決支援・プロジェクト成果発表支援を受ける 1 年間のコース）の 2 コース編成とする大きな変革をすることになった。

アドバンスコースについては、平成 27 年度からの開講を目指して、H25、26 年度は、プログラム開発に向けた準備期間として、プログラム開発に向けたアクションリサーチを共同研究で行っている。

### (2) 期間・内容・定員等

<ベーシックコース> 臨地実習を改善するための基本的知識・スキルを学ぶコース

①期 間：平成 25 年 8 月 19 日（月）～8 月 21 日（水） 3 日間

②内 容：臨地実習施設等において看護学生の看護実践を直接指導する看護学教育指導者である看護職が必要な、看護系大学における看護学教育、臨地実習の位置づけや考え方、学生の成長支援等の知識を学ぶ。時間割を表 1 に示す。

日 時	I	II	III	IV	
	9:00～10:30	10:40～12:10	13:30～15:00	15:10～16:40	
8 月 19 日 (月)	9:30～ 開講式 オリエンテーション	看護学教育の 基礎  千葉大学大学院 看護学研究科教授 和住淑子	臨地実習指導の 基礎  千葉大学大学院 看護学研究科准教授 黒田久美子	看護における 成人教育のあり方 東邦大学医療センター 佐倉病院 副看護部長 鈴木康美	
8 月 20 日 (火)	自組織の現状を踏まえた 指導過程のリフレクション  千葉大学大学院看護学研究科 (和住・黒田・河部・銭)		臨地実習場面の教材化 (17:00 終了予定)  千葉大学大学院看護学研究科 (和住・黒田・河部・銭)		
8 月 21 日 (水)		看護行政の動向  厚生労働省 医政局看護課補佐 加藤典子	看護高等教育行 政の動向 文部科学省 高等教育局医学教育課 看護教育専門官 石橋みゆき	特別講義 今、日本の看護職に 求められること 日本看護協会副会長 菊池令子	17:00～ 閉講式 (17:30 終了予定)



③受講者：38名

④実施・評価

定員30名のところ、応募が多数あり、演習のグループを増やすことで38名の受講生を受け入れることになった。

受講生は、30代～40代の中堅看護職が多く、三分の一は副看護師長職であった。1日目は座学中心、2日に演習という構成で行ったが、演習のグループワークも活発であり、受講生同士の意見交換も円滑であった。



写真1 「看護学教育の基礎」授業風景



写真2 臨地実習場面の教材化演習中

3日目の終了時に研修評価アンケートを実施した。結果を図1に示す。企画時は、中堅看護職にも国全体の保健医療の動向や職能団体からの情報も必要だと判断して、3日目を管理者研修との共催にした。そのため、看護学教育指導とは直接関わりのない講義内容も含まれており、他の科目に比較すると評価が低くなったと考えられた。自由記載をみると、「多施設の看護職との交流」や「あらためて看護や指導について考える機会となった」等、受講生にとって学びを得ている状況が確認できた。



図1 終了時の評価結果

⑤今後の課題

今年度より、短時間で凝集した研修を実施したが、短時間で効果的に実施でき、受講生同士の交流も図れることができると確認できた。管理者研修との共催部分については、対象者のニーズにあわせて、別々に企画していくことが必要だと考えられる。

## <アドバンスコース開発に向けたアクションリサーチ型共同研究>

①期間：平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月末日

### ②研究目的：

- ・看護系大学と臨地実習施設が協働して取り組む臨地実習に関連した組織変革課題を明確化し、その改善策を計画、実施、振り返り、評価・修正を行う。
- ・課題に取り組む過程を通して、教育－研究－実践をつなぐ（協働する）組織変革に必要な看護職の能力、育成支援の必要性を明らかにする。
- ・以上を元に、組織変革を推進する臨地実習指導者研修の研修プログラムを開発する。

### ③研究メンバー

看護実践研究指導センター教員と、以下の 3 組の看護系大学－臨地実習施設の研究メンバーで共同研究をすすめた。

- 千葉大学ペア：中村伸枝（千葉大学） & 上林多佳子（千葉大学医学部附属病院）
- 岩手県立ペア：福島裕子（岩手県立大学） & 林 由紀（岩手県立中央病院）
- 目白・東埼玉ペア：小林紀明（目白大学） & 奥角真紀（国立病院機構東埼玉病院）

### ④実施状況

平成 25 年度は、各々のペアで改善策の計画や実施をすすめ、看護実践研究指導センター教員は、必要時、利害関係のない立場を利用して、共同研究者としてインタビュー等のデータ収集の役割を担った。

各々のペアのテーマ・目的と進捗状況を以下に示す。

#### i 千葉大学ペア

テーマ：看護系大学の実習指導の質向上と臨床看護師の成長を促す大学・臨床間の連携・協働の要因に関する研究

目的：大学教員と臨床指導者間の連携・協働の取り組みの成果を、臨床看護師の成長および学生への学習効果という 2 つの観点から総合的に評価し、これらの評価につながった取組の性質を解明することを通して、実習指導の質向上と臨床看護師の成長を促す大学・臨床間の連携・協働の要因を明らかにする。

進捗状況：

大学教員と臨床指導者間の連携・協働の取り組みとして、実習中、指導継続用紙を使用している。この用紙は、臨床指導者からその日の部屋担当看護師に渡され、その日の指導内容を担当看護師が記入することにより、指導を継続する目的で作成されたものである。この用紙を使って指導経験のある看護スタッフへのグループインタビュー調査を行い、指導への影響を分析中である。

一方、学生に対しては実習記録と実習終了時のグループインタビューで、学習への影響や大学教員と臨床看護師の協働に関する意見を収集し、分析した。学生の学びを臨床指導者と大学教員が共有することで、学びが深まり、実習がスムーズに進むと学生は感じていた。この調査結果は、千葉大学看護学部紀要に投稿した。

#### ii 岩手県立ペア

テーマ：岩手県立中央病院における看護臨床実習の課題の明確化とその解決に向けた取組～看護臨床実習指導に関わる教員および臨床スタッフの「教育力」育成に向けて～

目的：看護基礎教育における臨地実習指導に必要な教育力を明らかにする。

進捗状況：

岩手県は、これまでに看護実践研究指導センターの看護学教育指導者研修への派遣を

継続的に実施してきており、その受講経験者と大学教員の協働の基盤があった。そこで、今回の取り組みについても、県立中央病院だけでなく、その他の県立病院の看護職 2 名も加えて、県立病院から 7 名、大学教員 5 名、看護実践研究指導センター教員 3 名で研究体制をとることとなった。9 月に倫理審査を終え、臨床看護職、大学教員、実習学生の 3 者を対象に、臨床実習で学生の学びが深まった経験、学びにつながらなかった経験を面接調査した。現在、データ分析中である。

### iii. 目白・東埼玉ペア

テーマ：看護実践能力向上のための教員と臨地実習指導者の協働と連携—学生の状況にあった指導案の立案、実施、評価の共有をめざして—

目的：看護系大学と実習施設の双方が協働・連携して、学生の状況にあった指導案の立案、実施、評価を行い、その取り組みの実際から、教員と指導者が共有すべき学生の状況と、教員と指導者が共有する指導案の内容に必要な要素、指導案に導かれた臨地実習指導の効果的な実施、評価の方法を明らかにすることを目的とする。

進捗状況：

老年看護学実習を対象として、以下の取り組みを実施した。臨地実習前に看護系大学と実習施設が一緒に行う事前研修の内容に、学生の状況把握と指導案の共有を組み入れ、双方が作成している指導案を点検し合い、学生の状況に合わせた指導案に修正した。修正した指導案を用いて指導展開を行い、実習の評価、翌日の計画の修正を日々実施した。事前研修時、日々の実習終了時の協働の場면을録音し、それをデータとした。現在、データ収集を修了し、教員と指導者が共有すべき学生の状況、教員と指導者が共有する指導案の内容に必要な要素、指導案に導かれた臨地実習指導の効果的な実施、評価の方法を分析中である。

### ⑤今後の課題

現在、各々のペアが改善策の実施や評価に取り組んでいる。26 年度 7 月までには、その成果が見え、振り返りが可能となるため、各々のペアに教育—研究—実践をつなぐ（協働する）組織変革に必要な看護職の能力、育成支援の必要性について、インタビューを実施し、組織変革を推進する臨地実習指導者研修の研修プログラムの骨子を組み立てる予定である。

## 7) 看護学教育ワークショップ

看護学教育ワークショップは、平成 11 年に文部省の委託事業として始まり、本センターが看護学教育研究共同利用拠点の認定を受けたことにより、平成 23 年度以降は千葉大学の独自事業として、文部科学省の後援を受けて開催してきている。

本年度は 15 回目の開催となり、テーマは『続・看護実践と教育の有機的連携に向けた看護系大学の取り組み』のもとに開催された。開催概要は下記のとおりである。

1. 期間：平成 25 年 10 月 28 日（月）～10 月 30 日（水）
2. 会場：千葉大学 けやき会館
3. テーマ：続・看護実践と教育の有機的連携に向けた看護系大学の取り組み
4. 参加校：国公立大学 58 校  
(内訳：国立大学 18 校、公立大学 11 校、私立大学 29 校)
5. 対象者：看護系大学において看護教育に責任を持つ立場にある教員（原則として教授職以上）であり、ワークショップの全日程に参加できる方。
6. 基調講演：「臨床と大学をつなぐ看護学教育者養成について～日本看護系大学協議会調査結果より」  
正木 治恵氏（日本看護系大学協議会高等教育行政対策委員会 前委員長、千葉大学大学院看護学研究科教授）
7. 特別講演：「臨床からみた看護学教育における臨床と大学の連携について」  
澤井 信江氏（滋賀医科大学医学部附属病院看護臨床教育センター長・准教授）
8. インフォメーション・エキスチェンジ：「看護学教育の発展を目指した臨床と教育の連携強化」  
市村 尚子氏（文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室専門官）
9. グループワークの検討テーマ  
メインテーマのもと、3つの検討テーマを事前にお知らせして、第1希望または第2希望でグループピ  
ングした。1グループあたり8名前後であった。
  - ① 臨地実習における臨床と大学の連携について（3グループ）
  - ② 講義・演習における臨床と大学の連携について（2グループ）
  - ③ 実践研究および研究成果の応用における臨床と大学の連携について（2グループ）
10. 助言者 門間 典子（東北大学病院 看護部長）  
佐藤 富貴子（新潟大学歯学総合病院 看護部長）  
別府 千恵（北里大学病院 看護部長／副院長）  
手島 恵（千葉大学大学院看護学研究科 教授）  
澤井 信江（滋賀医科大学医学部附属病院看護臨床教育センター長・准教授）  
山本 利江（千葉大学大学院看護学研究科 教授）  
野地 有子（千葉大学大学院看護学研究科 教授）



飯岡 由紀子 (聖路加看護大学 准教授)

吉沢 豊予子 (東北大学大学院医学研究科保健学専攻 教授)

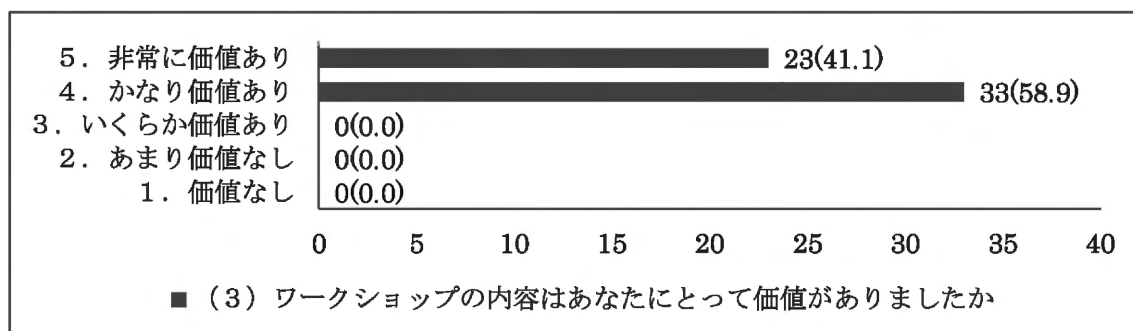
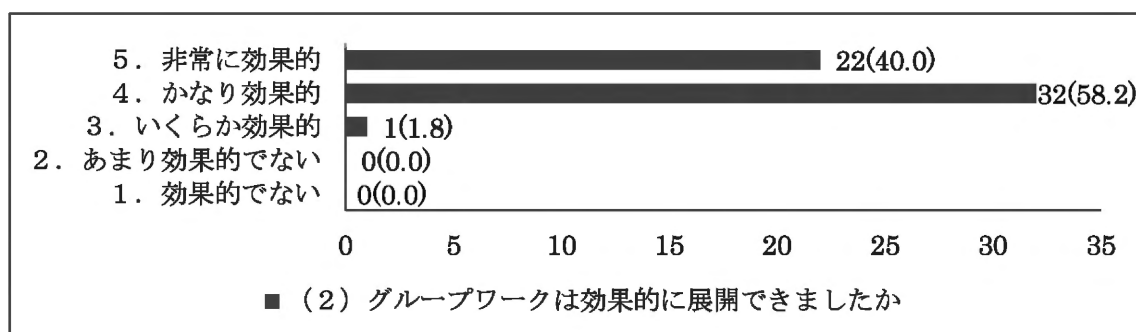
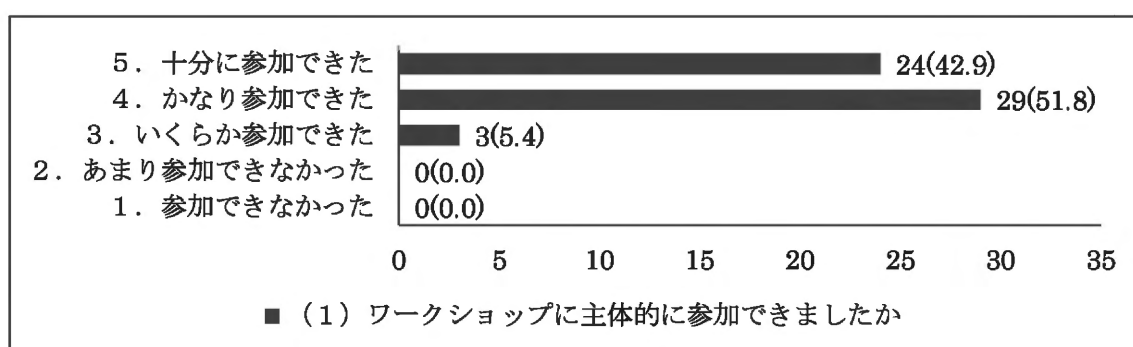
11.アドバイザー 石橋みゆき (文部科学省高等教育局医学教育課看護教育専門官)

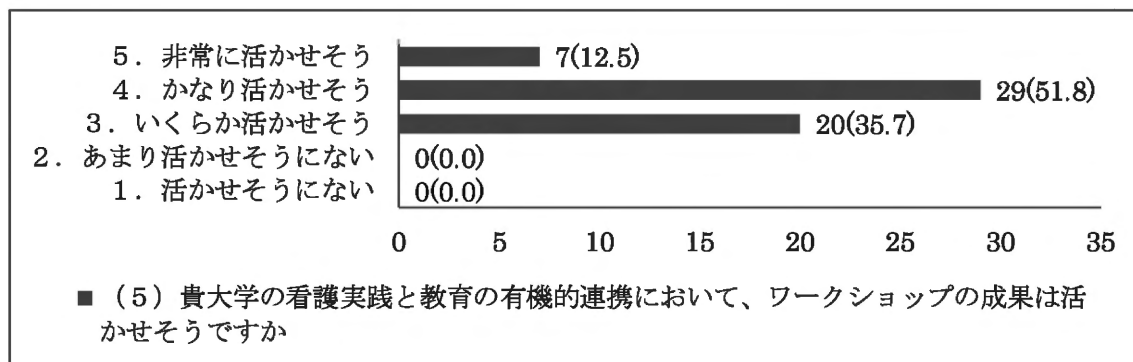
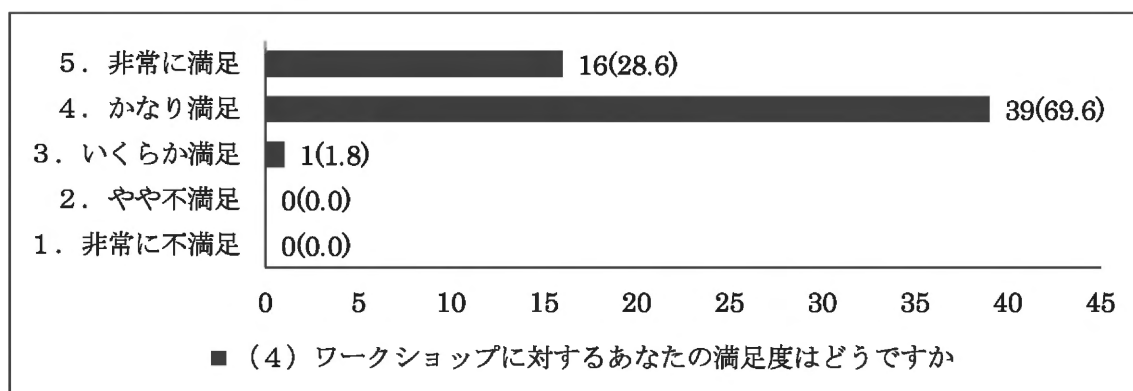
市村 尚子 (文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室専門官)

12.ワークショップ終了後の評価結果を以下に示す。

12-1. 今回のワークショップを振り返り最も近い番号に○をつけてください。

全体 56名 ( ) 内は%





12-2. 今回のワークショップを通して、良かったと思われる点を記入してください。

1) 講演について

【基調講演、特別講演、エクスチェンジについて】

- 基調講演、特別講演、エクスチェンジを通して現状課題を強く認識できた。
- 具体的でとても良かった。

2) グループワークについて

【課題の明確化ができた】

- 臨地実習、講義・演習について大学側の現状と課題が具体的になり、今後の工夫する点が明らかになった。
- 当大学の課題が明確になり、具体的な対策について考える事ができた。
- 地域・組織ごとの資源や役割、課題の違いが実感できた。
- 現在の課題を共有できたことと、臨床指導者との協働・教育という点は実際に行えていると感じ、さらに発展させていきたい。
- 参加している大学の現状を知り、現状と課題を共有できた。
- 大学と臨床の連携の必要性が明確になった。

【情報交換ができた】

- 各大学の状況がわかり、取り組み方の方略が理解できた。
- 情報交換を多くできた。仲間ができた。
- 他大学の先生方と直接意見交換でき、テーマが深まった事のみならず、仕事への向き合い方、専門性を高めていく姿勢で学ぶことができました。
- 全国の看護系大学の教員間での情報交換の場になった。

【新たな情報を得た】

- 文科省 GP について文科省はこのワークショップを生かそうとしていることを知ることができた。

- 看護研究など研究のための臨床とのつながりについて臨床からの要望を聞くことができた。
- 各大学の状況と先生方の将来に向けた意見が聞けた。
- 大学が多く設置され、どこの大学も実習施設・教員不足の中で、色々な工夫をして教育に取り組んでいることがわかった。
- GPの話など看護学教育の改革や看護学の発展が国の政策の中でどう動いているかを知る事ができた。
- 様々な大学の先生とのGWで視点が定まり、視野は広がった。現実可能性を考えた連携のヒントがたくさんあった。
- 文科省のコメントを聞くことができた。
- 国・公・私立大学が同じテーブルで討論し、トライアルの取り組みの成果などを具体的に知ることができた。

#### 【リフレクションの機会になった】

- これまで取り組んできたことの整理ができた。
- 他校の状況（方針方法 etc）を聞くことで、自施設を客観視することができた。
- ディスカッションの中でお互いの意見を通して、自分自身のリフレクションができたこと。
- 他大学の事情、状況、取り組みを知る事ができ、改めて自大学を客観的に見直す機会となった。

#### 【他大学との交流ができた】

- 他大学の先生方と有意義な意見、情報交換を行うことができた。
- 教員間のネットワークができた。
- 他大学間との交流、それが学生の交流につながる。
- 同じ悩みを持つ他大学の教員と出会い、今後連携が持てる可能性を感じた。

#### 【臨床側からの新たな視点が得られた】

- 臨床の立場のファシリテーターから臨床側の思い、見方等を理解しながらグループワークが進められた。要所要所でアドバイスをいただきありがたかった。

#### 【その他】

- 連携の目的・演習の目的について認識を新たにし、理解を深めることができた。
- ファシリテーターの先生のファシリテートも考えて行く適切な導きとなり、ファシリテートの参考になった。
- ワークショップに初めて参加をし、自分の思いを伝えることの大切さを学ぶことができた。
- 他大学の先生方と直接意見交換でき、テーマが深まった事のみならず、仕事への向き合い方、専門性を高めていく姿勢で学ぶことができました。
- 他の大学の先生方とフランクにお話できた。

12-3. 今回のワークショップを通して、芳しくなかったと思われる点や改善すべき点があれば、記入してください。

#### 【講演について】

- 講演が3本もあり、中途半端な感じがした。重要なものを1本しっかりやり、あとは情報提供で良いのでは？

#### 【全体討議について】

- 全体討議のテーマが変わっていくので考えづらかった。

●何について討議することによって全体としてのまとめとなっていたのか・・・と疑問が残りました。

●全体討議のテーマどり。結局深まらなかった。

●グループワークの課題が研究ではなかったので全体討議の話題が研究に焦点をあてられて展開したので、意見を考える間がなかった。3つのテーマを考えて全体討議に臨めば良かった。

●せっかく3つのテーマについて深くディスカッションが行われたにもかかわらず全体討議がこの3つのテーマから発展するものではなく、少し離れたところでディスカッションが行われたところが残念。ベースに3つのテーマがあり、それを深めるための講演、情報提供が行われていたと思います。まとめの全体討議は少しつながりにかけたものになり残念でした。今後の課題としていただきたいです。研究のみに最後までっていくことの意義が良くわかりませんでした。3つのテーマの相互関係、その相互関係がうまくいくことで看護教育がどこに向かっていくのか、またどこに向かっていきたいと考えているのか、そこのディスカッションがしたかったです。

●全体討議：検討すべき課題が明確でなかった。グループ別全体発表の後、グループで確認・検討する時間があると良かった。このワークをすると全体討議につながるのではないかと。

#### 【運営について】

●各自が今回の成果を持ち帰って、現場で取り組んでいくと思いますが、持ち帰ったものがどのような結果を生んでいるのかを評価する取り組みがあってもよいのではないかと。

●1日目の1時間のグループワークのあり方。導入講演をもう1演題を追加し2日目からGWでもよいのではないかと思いました。

#### 【時間割について】

●まとめる時間がもう少しほしい。

●発表時間や討議時間を充分ほしい。

●1日目のグループワークの時間がもう少しあると取り組みが早くなるかもしれません。

#### 【備品について】

●ホワイトボードを各室2枚頂けると良かったです。

#### 【その他】

●GWの部屋にお茶菓子などがあると良い。

●昼食は全日お弁当にしてほしいです。

●長時間に渡り拘束される（ただしGWの時間としては、アイスブレイクも含めこの程度は必要なので難しいところです）。事前に文献配布などして移動時間に読んでもらったりしても良いかもしれません。

●全体集合の場所のスペースがもう少し広い方が好ましいと思います。

#### 12・4. 成果をどのように役立てようとお考えですか。具体的にご記入ください。

●新設校ではあるが5年先のあるべき姿を構築する方法論を実際に計画して学科全体で取り組んでいく。

●若手教員の実習教育に関するFDを専攻で組織的（現状は講座毎）に取り組むべきか検討しようと思います。

●実習において看護部、臨地指導者とのコミュニケーションを密に行っていく。



- 日常的に臨床とのコミュニケーションが病院との連携では図れるようなことをやっていきたい (informal でも formal でも)。看護部と看護教員との委員会等、既存のものや新しいプロジェクトとしてのテーマのものなど検討できるといいと思いました。
- 卒業教育、基礎教育と分けて考えるのではなく、10年後位の先を見越した教育の継続を視野に入れたディスカッションを看護師と行い、基礎教育のあり方をもう一度検討する機会をもちたい。
- 臨床指導者の研修の企画 (シリーズもので)
- 看護実習記録のクラウド化の検討
- 研究における臨床と大学の連携についてはグループ発表の内容を参考に取り組みを開始したい。地域の中で目的を明確にして連携を深めるために大学だけでなく専門学校も含めて取り組んでいきます。

12・5. 今後、看護学教育ワークショップで取り上げてほしいテーマがあれば、具体的にご記入ください。

- 新人看護師教育における大学の役割
- 統合教育の意義とあり方について実施したことを踏まえてどう進めるか再検討充実の時期ではないだろうか
- 看護学の研究をどう発展させるか (他学部との連携、組織的取り組み、臨床の研究指導)
- 真にヘルスケア組織におけるエビデンス・ベースプラクティスのための構造づくり
- 臨床教育との学習モデルの構築
- 教員の実践能力や学生に期待する卒業時の実践能力について
- 先駆的な取り組みをしている組織のケースレポート、ケーススタディのような発表 (複数のステークホルダーによる報告)、可能ならその内容を学術雑誌に載せて欲しい。
- シミュレーション教育
- 基礎教育における実践能力を上げる教育的スキルなど大学院教育について
- 研究の連携については継続して欲しい。
- 大学教員の役割である地域貢献について多様化する中での役割のあり方。
- 看護大学が増えている傾向、学生の考え方や心理的な話、対応の検討など。
- 今回のワークショップ参加後に大学がどう変化したのか、変化しなかったとすれば何が問題なのか・・・振り返るためのワークショップを行って欲しい。(数年後に同メンバーで検討する)
- 全国からせつかく集まるので大学間の連携を行っていけるよう地域ごとでのグループワークも入るとよいのでは?→現実的に連携していく方法まで考察していけるとよい。
- 教育評価の看護分野における発展と現状

#### 【その他意見】

- 准教授、講師の参加も推奨してはいかがでしょうか。早い時期から看護学教育を深く考える機会には刺激になります。

## 8) 認定看護師教育課程（乳がん看護）

### I 平成 25 年度研修生要項

#### 1. 沿革

日本看護協会は、特定の看護分野において、熟練した看護技術と知識を用いて水準の高い看護実践のできる認定看護師を社会に送り出すことにより、看護現場における看護ケアの広がりや質の向上を図ることを目的に認定看護師制度を発足させた。本制度のもとに、認定看護師教育課程が確立される中で、がん看護領域では、緩和ケア、がん性疼痛看護、がん化学療法看護に続いて、平成 15 年に乳がん看護分野が認定され、平成 17 年に千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター内に認定看護師教育課程を設置した。

#### 2. 教育理念

看護実践研究指導センターの認定看護師教育は、特定された認定看護分野において、熟練した看護技術と知識を用いて、水準の高い看護実践のできる認定看護師を社会に送り出すことにより、看護現場における看護ケアの広がりや質の向上を図ることを目的とする。

#### 3. 教育目的

本認定看護師教育では、幅広い視野を持ち自立した判断ができ、看護実践を変革向上させていく創造能力を身につけ、かつ以下の 3 点の特定の認定看護分野の知識・技術を有する者を育成する。

- (1) 特定の看護分野において、個人・家族または集団に対して熟練した看護技術を用いて水準の高い看護を実践する。
- (2) 特定の看護分野において看護実践を通して看護職者に対し指導を行う。
- (3) 特定の看護分野において看護職者に対しコンサルテーションを行う。

#### 4. 分野、定員、教育期間

分野名                    乳がん看護        25 名

教育期間                6 ヶ月

年間スケジュール

開講式                  平成 25 年 7 月 1 日

授業期間                平成 25 年 7 月 1 日 ～ 12 月 27 日

平成 25 年 8 月 14 日 ～ 8 月 16 日（夏期休業）

閉講式                  平成 25 年 12 月 27 日

## 5. 教育内容, 授業時間数

(目的)

乳がん看護の質の向上を図るために, 適切なアセスメントを行い, 乳がん患者に対する集学的治療および治療に伴う副作用への専門的ケアとセルフケア確立に向けた指導・相談ができる能力を育成する。

乳がんの早期発見と乳がん患者・家族への看護に必要な専門的知識・技術を習得し, 専門性の高い看護実践を提供し, その実践を基盤として関連する他分野の専門・認定看護師と協働する能力と看護師の相談・指導に対応できる能力を育成する。

(単位: 時間)

共通科目名	120	専門基礎科目	105		
リーダーシップ	15	腫瘍学			
文献検索・文献購読	15	腫瘍の診断と治療			30
情報管理	15	臨床倫理			15
看護倫理	15	がん患者・家族の心理過程を理解するための諸理論			15
教育・指導	15	対象の主体的な取り組みを支援するための諸理論と方略			45
コンサルテーション	15				
対人関係	15				
看護管理	15				
専門科目	150	演習	30	実習	225
乳がん看護概論	15	学内演習	30	臨地実習	225
集学的治療を受ける乳がん患者の看護	45				
乳がんサバイバーとその家族へのサポート	15				
乳がんの専門的看護技術	75				

## II 調査・研究

乳がん看護認定看護師の実践と教育を推進する目的で, 下記の調査・研究に取り組んでいる。

- 阿部恭子, 金澤麻衣子: 若年乳がん患者の意思決定を支える看護実践. 第21日本乳癌学会総会プログラム抄録集, 221, 2013.
- 大野稔子, 北池正, 鈴木友子: 乳がん看護認定看護師教育課程修了者の実態調査. 第33回日本看護科学学会学術集会講演集, 473, 2013.
- 赤沼智子, 大野稔子, 北池正: 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター認定看護師教育課程(乳がん看護)外部評価報告書, 2013.
- 阿部恭子, 黒田久美子, 金澤麻衣子: 乳がん看護認定看護師の活動を推進している看護管理者の支援. 第28回日本がん看護学会学術集会講演集, 347, 2014.

### Ⅲ 認定看護師教育課程（乳がん看護）説明会

乳がん看護に携わる看護師，認定看護師資格取得を目指す看護師，看護管理者を対象に本課程のプログラムの内容と特徴，および，講義・演習・実習中の教育的な支援体制について説明した。

1. 日時：平成 25 年 11 月 9 日（土）13：00～16：00

2. 会場：千葉大学大学院看護学研究科 112 講義室

3. 参加者：35 名（事前申し込み 36 名，当日欠席者 1 名）

#### 4. プログラム

13:00～13:05 挨拶・オリエンテーション

13:05～13:30 認定看護師教育課程の概要

阿部 恭子（認定看護師教育課程 特任准教授）

・プログラムの内容と特徴，講義・演習・実習中の教育的な支援体制

13:30～13:45 乳がん看護認定看護師からのメッセージ

中村 薫（東京歯科大学市川総合病院）

・教育課程での学習の実際，資格取得後の看護実践

13:45～14:00 研修生からのメッセージ

古川 尚美（聖マリアンナ医科大学病院）

・教育課程での学習の実際，選抜試験に向けての準備

14:10～14:30 質問コーナー

14:30～15:50 交流会

#### 5. 説明会の評価

1) 評価（アンケート）の回収状況 回答者 34 名 回答率 97.1%

#### 2) 回答者の背景

	項目	人数
①臨床経験年数	5 年未満	2 名
	5 年以上 10 年未満	9 名
	10 年以上 15 年未満	11 名
	15 年以上 20 年未満	8 名
	20 年以上	4 名
②乳がん看護領域での 臨床経験年数	5 年未満	6 名
	5 年以上 10 年未満	23 名
	10 年以上 15 年未満	3 名
	15 年以上 20 年未満	1 名
	20 年以上	1 名
③職位	看護師長	0 名
	副師長	4 名
	スタッフナース	26 名
	その他（主任等）	3 名
	無回答	1 名



### 3) 説明会の開催方法について評価及び結果

項目	よかった		まあまあよかった		あまりよくなかった		よくなかった		無回答	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
申し込み方法	32名	94%	2名	6%	0名	0%	0名	0%	0名	0%
会場	26名	76%	6名	18%	1名	3%	0名	0%	1名	3%
開催時期	32名	94%	2名	6%	0名	0%	0名	0%	0名	0%
開催時間	30名	88%	3名	9%	0名	0%	0名	0%	1名	3%

### 4) 説明会の各内容について評価及び結果

項目	かなりそうである		まあまあそうである		あまりそうではない		まったくそうではない		無回答	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
認定看護師教育課程の概要について理解できた	27名	79%	3名	9%	0名	0%	0名	0%	4名	12%
乳がん看護認定看護師からのメッセージは役に立った	30名	88%	4名	12%	0名	0%	0名	0%	0名	0%
研修生からのメッセージは役に立った	31名	91%	3名	9%	0名	0%	0名	0%	0名	0%

### 5) どのようにしてこの説明会を知りましたか

項目	人数
①案内チラシを見て	3名
②所属施設の看護管理者からの紹介	8名
③所属施設の乳がん看護認定看護師からの紹介	1名
④所属施設の他分野の認定看護師からの紹介	2名
⑤友人・知人からの紹介	4名
⑥千葉大学のホームページを見て	17名
⑦その他	3名

6) この説明会の参加理由をお教えてください

項目	人数
①平成 26 年度の受験を考えているため	25 名
②平成 27 年度以降の受験を考えているため	5 名
③いつ受験するか決めていないが、乳がん看護認定看護師に興味があるため	7 名
④受験するかどうかわからないが、（乳がん看護認定看護師に限らず）認定看護師に興味があるため	2 名
⑤併願校にしているため	0 名
⑥所属施設の看護師に、乳がん看護認定看護師資格を取得してほしいと考えているため	3 名

7) 自由記載

- ・ 教員、CN、研修生、それぞれの説明を聞くことができ、この会に来た目的が達成できました。ありがとうございました。
- ・ 研修生、認定看護師、講師の先生方の生の声がきけ、質問の機会をいただいたので大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・ 自分の中での迷いがありましたが、勉強したいと考えられました。ありがとうございました。
- ・ 貴重なお話、体験を聞くことができとても充実した説明会でした。認定を取得したいという気持ちは強いですが、自分の回りの上司、スタッフにも業務での負担をかけてしまうこともあるので、時間をかけてCNや上司などに相談して取得をしていこうと思います。
- ・ 受験までの流れや活動内容など実際の様子がとてもよく理解できて良かったです。
- ・ ていねいな説明をありがとうございました。今後検討していきたいと思います。
- ・ 受験のことで頭がいっぱいであせってしまっている。上司とのやりとりや、何をしていったらよいかわかり良かったと思う。自分にまったく自信がなく認定にふさわしいとは思わないが、がんばりたいと思います。ありがとうございました。
- ・ 自施設での認定の必要性をアピールする必要性を感じました。
- ・ どの内容も大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・ 説明会の内容もよかったです。皆さんからの質問コーナーがあつて自分が聞きたかったこと、質問すればよかったことがどんどんでてとても良かったです。本の紹介もあり、たくさんあるなか、しばれていけそうに思います。お忙しい中、このような説明会を行って頂きありがとうございました。

#### IV 事例報告会

臨地実習で研修生が受け持った事例について事例報告を行った。

1. 日時：平成 25 年 12 月 16 日（月）～17 日（火）
2. 会場：千葉大学看護学部 112 講義室
3. プログラム

研修生氏名	演題名
東谷 由美香	乳がんの治療過程で強い不安を訴えた患者への支援
安藤 雅子	乳がん術後患者への乳房補整の支援
猪又 知子	化学療法の副作用に対する不安を抱える乳がん患者への看護支援
今井 博美	感情や思いの表出が少ない乳がん患者との関わりを振り返る
瓜生 悦子	乳房切除術後の創部の受容を促す支援
影山 実子	術前と術後の治療方針が変更となった乳がん患者への看護支援
笹岡 綾子	転移性乳がん患者の母親としての思いと役割を支える看護支援
笹原 奈津美	転移乳がん患者が希望を持ち、その人らしく生活するための支援の必要性
白濱 泉	早期退院に不安がある乳がん患者への支援 ～チーム医療における看護師の役割を考える～
鈴木 和香子	化学療法を再開する再発転移のある乳がん患者への支援
園原 一恵	再発乳がん患者の乳房切除術における患肢挙上への看護支援
津下 智子	乳房切除術によるボディイメージの変容を支える看護支援
中川 綾	術後のボディイメージに混乱を来した乳がん患者の看護支援
長野 美香	乳房再建手術と豊胸術を受けた患者への看護支援
中村 貴子	センチネルリンパ節生検術によるリンパ浮腫発症の不安がある乳がん術後患者への看護支援
名取 由貴	ボディイメージの変容へのケア ～術後乳がん患者のニードに応じた乳房の補整のケア～
藤原 キミ	センチネルリンパ節生検で転移があり腋窩リンパ節郭清となった乳がん患者への看護支援
古川 尚美	乳房切除術後、創部治癒遅延に不安がある患者へのセルフケア支援
水越 梓	セクシュアリティの問題を通して夫婦関係の変化に向き合った乳がん患者に対する看護支援
三富 亜希	局所進行乳がん患者を支える家族への支援について考える
三村 佳誉子	高齢乳がん患者へのリンパ浮腫予防のセルフケア支援
村崎 まこと	乳がん患者の術式選択における意思決定の過程を振り返る

## V 実習指導者連絡会

臨地実習指導者担当者を対象に、実習指導において感じる困難や悩みを相互に話し合い、これまでの実習指導における課題を明確にするとともに、共通認識を図り、質の高い実習指導を目指すことを目的に開催した。

1. 日時：平成 26 年 1 月 22 日（水）13：00～15：00

2. 会場：千葉大学大学院看護学研究科 112 講義室

### 3. プログラム

13:00～13:45 平成 25 年度臨地実習報告（阿部恭子特任准教授）

13:45～14:15 質疑応答

14:15～15:00 意見交換（ファシリテーター：阿部恭子特任准教授、大野稔子特任助教）

### 4. 参加施設

(1) 国立がんセンター中央病院

(2) 国立がんセンター東病院

(3) 聖路加国際病院

(4) 千葉県がんセンター

(5) がん研有明病院

(6) 聖隷佐倉市民病院

(7) 三井記念病院

(8) JR 東京総合病院

(9) 東京歯科大学市川総合病院

(10) 昭和大学病院

(11) 聖マリアンナ医科大学病院

### 5. 意見交換

#### 1) 臨地実習指導において戸惑ったこと、当教育課程への要望

- ・実習指導者としてどの程度期待されているのか、どんなニーズがあるか迷った。
- ・教員に相談するタイミングが難しい→メンタルな変化の時は教員への連絡。
- ・課題達成が難しい研修生自身の実習に対する捉え方に戸惑った→課題が取れない場合は将来的な自己学習で補うので課題をとることに焦らないようにしてほしい。
- ・自施設にないことを実習でやってみたいと思うことと実習課題との乖離に困った。

#### 2) その他

- ・実習を初めて受け入れるために、病院全体、看護部として実習環境を整えた。
- ・実習を受け入れたことは病院スタッフにとって良い刺激になった。
- ・実習指導者としても病院管理上も、緊急時の連絡方法や研修生の所在について把握しておく必要があると感じた。
- ・研修生の背景、レディネスを踏まえた指導が必要となってきた。



## 9) 教育・研究活動

2012年4月～2013年3月

### 研究活動

[学会発表抄録]

#### ◎和文

1. 野地有子, 小山秀夫, 杉山みち子, 宇田淳: 管理栄養士による居宅療養管理指導: 再生に向けての提言 - 第2報 事例インタビュー調査から -. 第51回日本医療・病院管理学会学術総会演題収録集, 294, 2013.
2. 辻村真由子, 野地有子, 北池正, 西山正恵, 池袋昌子: 韓国の看護系大学における学部学生の文化的能力を高める教育的取り組みとその背景. 第33回日本看護科学学会学術集会講演集, 2013.
3. 辻村真由子, 野地有子, 北池正, 西山正枝, 池袋昌子: 韓国の病院における外国人患者への対応の現状と課題-看護師の文化的対応能力のアセスメントツールの作成に向けて日本健康科学学会第29回学術大会抄録集, 195, 2013.
4. 大島紀子, 野地有子: 看護職による長時間労働面談の実施について-A社の取り組みについての現状と課題-. 日本健康科学学会第29回学術大会抄録集, 199, 2013.
5. 白尾聡子, 村上理代, 野地有子: 新人看護師へのメンタリングにフェイスマークを導入して. 日本健康科学学会第29回学術大会抄録集, 194, 2013.
6. 金子美千代, 野地有子: 交代制勤務者の乳がん検診希望率を向上させるための取り組みについて. 日本健康科学学会第29回学術大会抄録集, 189, 2013.
7. 小山秀夫, 杉山みち子, 野地有子, 宇田淳: 管理栄養士による居宅療養管理指導: 再生に向けての提言 - 第1報 実態調査から -. 第51回日本医療・病院管理学会学術総会演題収録集, 293, 2013.
8. 和住淑子, 山本利江, 斉藤しのぶ: 「看護婦登録制度論争」における F. Nightingale の認識と行動の特徴について. ナイチンゲール研究学会第34回研究懇談会資料, 2013.
9. 和住淑子, 錢淑君: 台湾「安寧緩和医療条例 (ホスピスケア法)」制定過程における看護職の貢献に関する研究. 第33回日本看護科学学会学術集会講演集, 297, 2013.
10. 和住淑子, 錢淑君: 看護系大学の質保証のしくみに関する日本と台湾の比較. 日本看護学教育学会第23回学術集会講演集, 233, 2013.
11. 山本利江, 和住淑子, 斉藤しのぶ: 19世紀大英帝国植民地時代のインドに対する F. Nightingale の諸活動について. ナイチンゲール研究学会第34回研究懇談会資料, 2013.
12. 藤田恵理子, 和住淑子: 心臓血管外科手術後患者の離床に対する看護師の判断に関する研究. 千葉看護学会第19回学術集会講演集, 52, 2013.
13. 櫻井友美, 和住淑子: 独立型三次救急医療施設における初療看護師の着衣の細菌汚染度. 日本救急看護学会雑誌, 15 (3), 269, 2013.
14. 風野美樹, 高梨奈保子, 和住淑子: 集中治療室に入室する心疾患患者の便秘の実態把

- 握と看護師の意識. 第 44 回日本看護学会成人看護 I 学術集会抄録集, 177, 2013.
15. 黒田久美子, 藤沼康樹, 酒井郁子: 実践と研究の‘わ(環・輪・和)’を感じよう—領域横断型学会の強みを活かす, 千葉看護学会第 19 回学術集会講演集, 17-18, 2013
  16. 小澤 千聡, 高山 芳栄, 疋田 歩, 黒田 久美子, 横尾 英孝: 糖尿病網膜症発症・進展阻止への教育支援の効果 自覚症状のない段階からの眼科通院継続向上のための教育プログラム, 糖尿病, 56Suppl.1, S-243, 2013
  17. 錢淑君: 教育ワークショップⅢあんまマッサージを通じた身体活用. 文化看護学会第 5 回学術集会抄録集, 13, 2013.
  18. 本田彰子, 正野逸子, 平山香代子, 炭谷靖子, 菊池和子, 荒木晴美, 王麗華, 栗本一美, 赤沼智子: 看護過程関連図作成における在宅看護領域アセスメントの特徴—在宅療養者・生活者をとらえる視点—, 日本看護学教育学会誌, 第 23 回学術集会講演集, 188, 2013.
  19. 本田彰子, 正野逸子, 炭谷靖子, 荒木晴美, 菊池和子, 上野まり, 赤沼智子, 栗本一美, 平山香代子, 王麗華: 在宅看護における現任教育内容の体系化—個別学習支援プログラム OJT シートの活用と実際—, 日本看護学教育学会誌, 第 23 回学術集会講演集, 137, 2013.
  20. 阿部恭子, 金澤麻衣子: 若年乳がん患者の意思決定を支える看護実践. 第 21 日本乳癌学会総会プログラム抄録集, 221, 2013.
  21. 阿部恭子, 黒田久美子, 金澤麻衣子: 乳がん看護認定看護師の活動を推進している看護管理者の支援. 第 28 回日本がん看護学会学術集会講演集, 347, 2014.
  22. 大野稔子, 北池正, 鈴木友子: 乳がん看護認定看護師教育課程修了者の実態調査. 第 33 回日本看護科学学会学術集会講演集, 221, 2013.
  23. 白鳥孝子, 浅井美千代, 広瀬由美子, 阿部恭子, 佐藤まゆみ: 外来通院する慢性期・回復期患者へのセルフマネジメント支援に関する学生の学び—外来実習の記録分析から—. 第 23 回日本看護学教育学会学術集会講演集, 178, 2013.
  24. 白鳥孝子, 広瀬由美子, 浅井美千代, 阿部恭子, 佐藤まゆみ: 外来通院患者とのかかわりを通して得た退院支援に関する学生の学び—外来実習の記録分析から—. 第 44 回日本看護学会抄録集 (看護教育), 93, 2013.
  25. 坂井勇太, 小野美奈子, 造田泰子, 阿部恭子: 術後初回歩行援助の開始に戸惑う場面でのアセスメント. 第 44 回日本看護学会抄録集 (成人看護 I), 273, 2013.
  26. 根本早絵, 斎藤祐佳里, 菊池春奈, 山田真由子, 福家友美子, 阿部恭子: フローチャート導入による退院支援の標準化と有用性の検証. 第 44 回日本看護学会抄録集 (看護管理), 363, 2013.
  27. 鈴木友子, 北池正, 遠藤和子, 野地有子, 和住淑子, 黒田久美子, 錢淑君: 看護系大学がFD活動において感じる困難とFD企画実施状況との関連について. 第 33 回日本看護科学学会学術集会講演集, 445, 2013.

◎英文

28. Noji, A., Koyama, H., Sugiyama, M., Uda, J., : Nutrition Care and Home Management for the Frail Elderly by National Long-Term Care Insurance – The

- state and challenge by the interview study for the care providers－. The 3<sup>rd</sup> Global Congress for the Qualitative Health Research. Khon Kaen, Thailand, 2013.
29. Yoshiko Wazumi, Kumiko Kuroda, Tomoko Suzuki, Shu Chun Chien, Ariko Noji, Tadashi Kitaike: Development of the Faculty Development Mother Map in Nursing Education. 17th East Asian Forum of Nursing Scholars, 38(PS B-58), 2014.
30. Shu Chun Chien, Yoshiko Wazumi, Toshie Yamamoto, Shinobu Saito, Akiko Nagata: The Effectiveness of Nursing Concepts Inherited from Nightingale for the Modern Medical Model. The 2013 International Nursing Conference on Health, Healing, & Harmony: Nursing Values. Puket, Thailand. (ID00050-6), 2013.
31. Saito S, Kawabe F, Nagata A, Wazumi Y, Yamamoto T: Effect of the education of the nursing skills that utilized simulated patients, 17th East Asian Forum of Nursing Scholars
32. Yamamoto T, Shu Chun Chien, Kawabe F: Studies on the use of oriental medicine in nursing in Japan, 17th East Asian Forum of Nursing Scholars

〔報告書〕

33. 赤沼智子, 大野稔子, 北池正: 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター認定看護師教育課程(乳がん看護)外部評価報告書, 2013.
34. 小山秀夫, 杉山みち子, 野地有子, 宇田淳他, 日本・健康栄養システム学会: 『居宅療養管理指導のあり方に関する調査研究事業』居宅高齢者の栄養ケア・マネジメントのための居宅療養管理指導の実態把握とその体制に関する研究. 報告書(平成24年度厚生労働省老人保健事業推進等補助金(老人保健健康増進等事業分)), 2013.
35. 野地有子, 北池正, 辻村真由子, 池崎澄江, 田所良之, 池袋昌子, 西山正恵: 東アジア圏における看護師の文化的対応能力に関する国際比較研究、平成24年度千葉大学研究支援プログラム実施報告書(科学研究費助成事業の応募支援), 2013.

〔総説・短報・実践報告・資料・その他〕

36. 北池正, 川島啓二, 遠藤和子, 鈴木友子: 看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト. 日本看護研究学会誌, 36(3), 107, 2013
37. 北池正, 野地有子, 和住淑子, 黒田久美子, 錢淑君, 赤沼智子, 鈴木友子: 看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用について. 第33回日本看護科学学会学術集会講演集, 222, 2013.
38. 北池正, 鈴木友子, 野地有子, 和住淑子, 黒田久美子, 錢淑君, 赤沼智子: 看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト, 千葉看護学会第19回学術集会講演集, 60, 2013.
39. 野地有子: クリティカルシンキングのわが国の看護教育における浸透と課題 - クリティカルシンキングを看護教員が身につける方策について, 看護教育, 54(6), 450-456, 2013.
40. 野地有子: 第29回学術大会報告. 日本健康科学学会誌, 29(4), 257-262, 2013.
41. 野地有子: 居宅療養管理指導事例のインタビュー調査からの現状と課題. 日本健康・



栄養システム学会誌, 13(1), 46, 2013. 特別講演座長

42. 野地有子：エンド・オブ・ライフからみたよるべなき時のケア．日本健康科学学会第 29 回学術大会抄録集, 146, 2013. 国際ワークショップ
43. 野地有子, 長江弘子, 深堀浩樹：ELNEC-G（高齢者版）エンド・オブ・ライフケア教育プログラム．日本健康科学学会第 29 回学術大会抄録集, 177, 2013.
44. 和住淑子：巻頭言 看護学学術用語－現在・過去・未来－, 日看科会誌, 33(2), 1, 2013.
45. 和住淑子：実践の場に身を置く看護師が行う看護研究だからこそその意義とは, 看護展望, 39(3),14-18, 2014.
46. 遠藤和子, 黒田久美子, 鈴木友子, 錢淑君, 野地有子, 和住淑子, 北池正：看護学教育における FD マザーマップの開発（2）FD マザーマップの活用法, 看護教育, 54（4）, 298-304, 2013.
47. 阿部恭子, 黒田久美子, 赤沼智子：乳がん看護認定看護師の活動拡大と支援ニーズ－資格取得 3 ヶ月後と 4 年後の活動状況の分析－. 千葉大学大学院看護学研究科紀要 36 号, 57 - 64, 2014.
48. 阿部恭子：内分泌療法（ホルモン療法）を受ける患者への支援～アドヒアランスの促進に向けて～. がん看護, 19（2）, 151-155, 2014.

〔学会・ワークショップ・シンポジウム運営〕

49. 野地有子：日本健康科学学会第 29 回学術大会、『高齢社会を豊かに生きる』－よるべなき時代の心と身体のありよう－平成 25 年 8 月 3 日、4 日、国立オリンピック記念青少年総合センター
50. 野地有子：国際ワークショップ・国際シンポジウム、『アジア圏における看護職の文化能力の評価と能力開発・臨床応用に関する国際比較研究』、「モース先生によるミックスド・メソッド国際ワークショップ」平成 26 年 3 月 8 日、「国際シンポジウム 看護職の文化能力」平成 26 年 3 月 9 日、千葉大学けやき会館



## 教育活動（学外）

1. 平成 25 年 6 月 9 日 野地有子  
派遣先：日本健康・栄養システム学会、平成 25 年度臨床栄養師研修 “6 月認定講座”  
目的：「地域栄養活動および異文化対応」非常勤講師
2. 平成 25 年 6 月 20 日 野地有子、鈴木友子  
派遣先：札幌医療大学  
目的：「FD マザーマップの概要と使い方」講師
3. 平成 25 年 7 月 30 日～平成 26 年 1 月 17 日 野地有子  
派遣先：千葉県看護協会  
目的：認定看護管理者制度教育課程運営委員
4. 平成 25 年 5 月 17 日 和住淑子  
派遣先：千葉県立保健医療大学看護学科  
目的：「看護政策論」非常勤講師
5. 平成 25 年 5 月 24 日 和住淑子  
派遣先：東京都看護協会  
目的：ファーストレベル研修講師（「看護専門職論」担当）
6. 平成 25 年 5 月 27 日 和住淑子  
派遣先：東京慈恵会医科大学附属柏病院  
目的：臨地実習指導者研修講師
7. 平成 25 年 7 月 31 日 和住淑子  
派遣先：千葉県立鶴舞看護専門学校  
目的：特別講義「看護倫理」講師
8. 平成 25 年 8 月 1 日 和住淑子  
派遣先：大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻  
目的：「看護理論」非常勤講師
9. 平成 25 年 8 月 5 日 和住淑子  
派遣先：埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科看護学専修  
目的：「看護理論」非常勤講師
10. 平成 25 年 8 月 10～11 日 和住淑子  
派遣先：三井記念病院  
目的：看護管理者研修講師
11. 平成 25 年 8 月 12 日 和住淑子  
派遣先：千葉市立青葉看護専門学校  
目的：研修「臨地実習指導について」講師
12. 平成 25 年 8 月 31 日 和住淑子  
派遣先：東京慈恵会医科大学葛飾医療センター  
目的：看護部研修「看護実践における『看護覚え書』の意味を理解する」講師
13. 平成 25 年 10 月 17 日 和住淑子  
派遣先：広島文化学園大学看護学部

- 目的：教員研修会「看護学教育におけるFDマザーマップ」講師
14. 平成25年11月1日 和住淑子  
派遣先：東京都看護協会  
目的：ファーストレベル研修講師（「看護専門職論」担当）
15. 平成25年12月13日 和住淑子  
派遣先：学校法人慈恵大学  
目的：平成25年度看護監督者研修「看護管理に必要な知識体系」講師
16. 平成26年2月8日 和住淑子  
派遣先：福井県立大学看護福祉学部  
目的：KF枠研究費による研修会「臨地実習指導について」講師
17. 平成25年6月17日 黒田久美子  
派遣先：日本看護協会看護研修センター 認定看護師課程：糖尿病学科  
目的：講義「日常生活行動における生活調整と援助」
18. 平成25年10月1日 黒田久美子  
派遣先：千葉大学医学部附属病院  
目的：院内研修 講義「プレゼンテーションのすすめ」
19. 平成25年10月6日 黒田久美子  
派遣先：山梨県立大学大学院看護学研究科  
目的：講義・演習「看護継続教育論」非常勤講師
20. 平成25年10月8日 黒田久美子  
派遣先：佛教大学看護学部  
目的：FD講義「看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用プロジェクト」
21. 平成25年10月22日 黒田久美子  
派遣先：千葉大学医学部附属病院  
目的：臨地実習指導担当者研修 話題提供「看護を伝える～看護学教育指導者研修受講者からの学び」
22. 平成25年11月10日 黒田久美子  
派遣先：山梨県立大学大学院看護学研究科  
目的：講義・演習「看護継続教育論」非常勤講師
23. 平成25年12月15日 黒田久美子  
派遣先：山梨県立大学大学院看護学研究科  
目的：講義・演習「看護継続教育論」非常勤講師
24. 平成25年7月11日 赤沼智子  
派遣先：千葉県看護教員養成講習会  
目的：質的研究の方法とクリティーク 非常勤講師
25. 平成25年11月26日から平成26年1月10日までの間、計3回  
派遣先：千葉県看護教員養成講習会  
目的：研究計画書作成演習の指導 非常勤講師
26. 平成25年9月11日 阿部恭子

派遣先：静岡県立静岡がんセンター 認定看護師教育課程：乳がん看護  
目的：講義「意思決定支援」

27. 平成 25 年 11 月 19 日 阿部恭子

派遣先：東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科

目的：在宅ケア・緩和ケア看護学演習 A

「がん患者の形態機能における変化と受容 QOL を高める援助・乳がん」

28. 平成 25 年 12 月 3 日 阿部恭子

派遣先：千葉県立保健医療大学健康科学部看護学科

目的：講義「がん看護学」

29. 平成 26 年 3 月 8 日 阿部恭子

派遣先：千葉県がんセンター

目的：看護研究発表会講評

### 3. 資料

#### 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター規程

平成16年4月1日

制定

#### (趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人千葉大学の組織に関する規則第17条に定める千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター(以下「センター」という。)の管理運営に関し、必要な事項を定める。

#### (目的)

第2条 センターは、全国共同利用施設として、看護学の実践的分野に関する調査研究、専門的研修その他必要な専門的業務を行い、かつ、国立大学法人の教員その他の者で、この分野の調査研究に従事するものの利用に供することを目的とする。

#### (研究部)

第3条 センターに、次の研究部を置く。

- 一 ケア開発研究部
- 二 政策・教育開発研究部

#### (職員)

第4条 センターに、次の職員を置く。

- 一 センター長
- 二 教授、准教授、講師、助教、助手及びその他の職員

#### (センター長)

第5条 センター長は、センターの管理運営に関する業務を総括する。

2 センター長の選考は、看護学研究科の教授の中から看護学研究科教授会(以下「教授会」という。)の議に基づき、学長が行う。

3 センター長の任期は2年とし、1回を限度として再任することができる。

#### (運営協議会)

第6条 センターに、センターの事業計画その他運営に関する重要事項を審議するため、センター運営協議会(以下「協議会」という。)を置く。

#### (組織)

第7条 協議会は、次に掲げる者をもって組織する。

- 一 看護学研究科長
- 二 センター長
- 三 教授会構成員の中から教授会が選出した者若干名
- 四 看護学研究科外の学識経験者若干名



- 2 前項第3号及び第4号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。
- 3 第1項第4号の委員は、看護学研究科長の推薦に基づき学長が委嘱する。

(会長)

第8条 協議会に会長を置き、看護学研究科長をもって充てる。

- 2 会長は、協議会を召集し、その議長となる。

(運営委員会)

第9条 センターに、次の事項を審議するため運営委員会(以下「委員会」という。)を置く。

- 一 センターの事業計画に関する事。
- 二 センターの予算の基本に関する事。
- 三 その他センターの管理運営に関する事。

(組織)

第10条 委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

- 一 センター長
- 二 センター所属の教授、准教授及び講師
- 三 看護システム管理学専攻専任の教員
- 四 教授会構成員(前2号に掲げる者を除く。)の中から教授会が選出した者3名

(委員長)

第11条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、委員会を召集し、その議長となる。

(会議)

第12条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開き議決することができない。

- 2 委員会の議決は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- 3 委員長は、必要と認めるときは、委員以外の者を会議に出席させることができる。

(共同研究員)

第13条 センターは、国立大学法人の教員その他の者で看護学の実践的分野に関する調査研究に従事するものを共同研究員として受け入れることができる。

- 2 共同研究員に関し必要な事項は、別に定める。

(研修)

第14条 センターは、必要に応じ看護教員及び看護職員の指導的立場にある者に対し研修を行うものとする。

- 2 研修に関し必要な事項は、別に定める。

(事務処理)

第15条 センターの事務は、看護学部事務部において処理する。

(細則)

第16条 この規程に定めるもののほか、この規程の実施に関し必要な事項は、教授会の議を経て看護学研究科長が定める。

附 則

- 1 この規程は、平成16年4月1日から施行する。
- 2 この規程の施行の際国立大学法人法(平成15年法律第112号)附則別表第1の上欄に掲げる千葉大学(以下「旧千葉大学」という。)において定められた千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター規程第7条第1項第3号及び第4号の規定により任命された委員である者は、この規程の施行の日において、それぞれ第7条第1項第3号及び第4号により任命されたものとみなす。この場合において、その任命されたものとみなされる者の任期は、第7条第2項の規定にかかわらず、それぞれ旧千葉大学において付された任期の末日までとする。

附 則

この規程は、平成17年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

- 1 この規程は、平成21年4月1日から施行する。
- 2 この規程の施行の際千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター規程(以下「旧規程」という。)第7条第1項第3号及び第4号の規定により任命された委員である者は、この規程の施行の日において、それぞれ第7条第1項第3号及び第4号により任命されたものとみなす。この場合において、その任命されたものとみなされる者の任期は、第7条第2項の規定にかかわらず、それぞれ旧規程において付された任期の末日までとする。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

**看護実践研究指導センター年報**

**№. 32 (平成25年度)**

平成26年5月発行

**編集兼発行者** 千葉大学大学院看護学研究科  
附属看護実践研究指導センター  
〒260-8672  
千葉市中央区亥鼻1丁目8番1号  
**TEL** 043-226-2378

**印刷所** 三陽メディア(株) 千葉営業所  
千葉市中央区浜野町1397  
**TEL** 043-266-8437